

葉隱抄

特 261

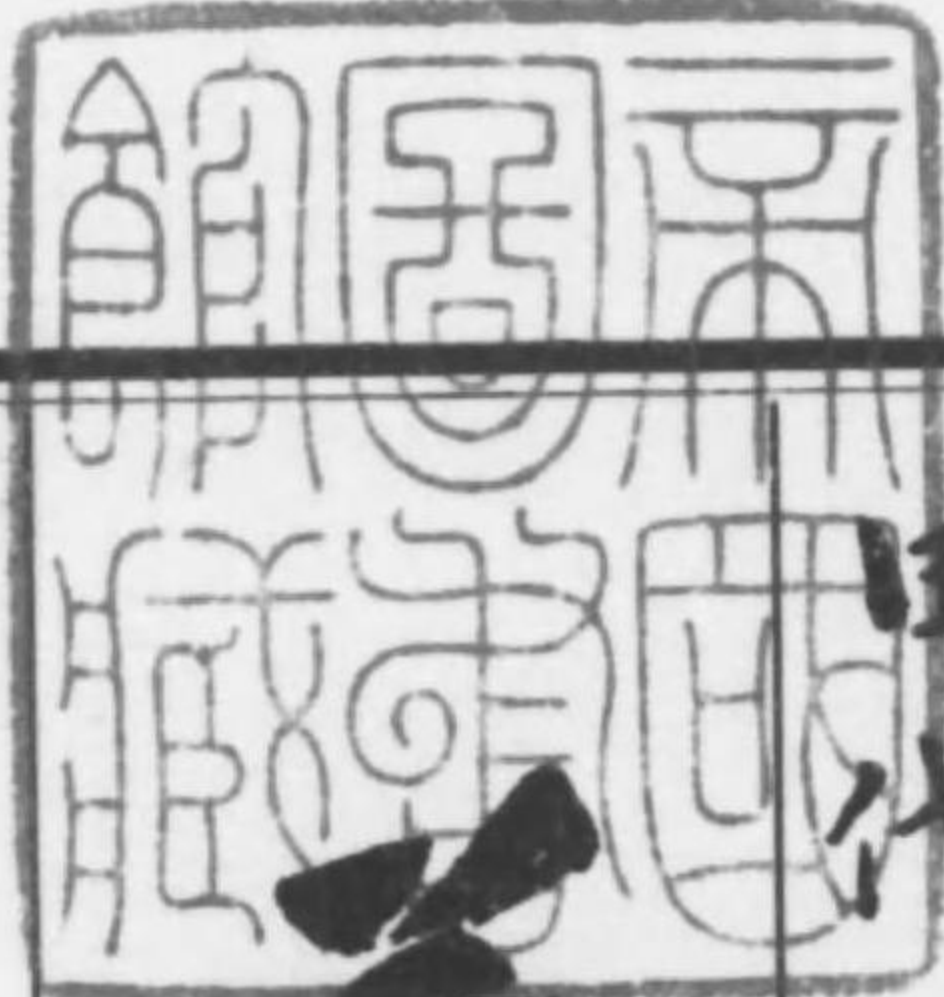
318



始



特 261
318



山本常朝先生述
陣基先生編

葉隱抄

角田貫次私抄
國維會青年部版



山本常朝先生筆蹟 (中野禮四郎氏所藏)

憂世から何里あらか山櫻 常朝
みな人は江戸へ遊くらむ秋の暮 常朝

おほよそ

一、葉隱の成立の由來、その口述者山本常朝編者田代陣基の兩先生の略傳、等については序節並びにその略註を參看下さるるよう。

一、この私抄は山本先生の直接の教訓をその主眼とし、従つて抄録の範圍も第一卷(漫草、夜陰之閑談、聞書の一、教訓、二百五節)、第二卷(聞書の二、教訓、百四十一節)、第十一卷(雜、百六十七節)の三卷に限ることとした。即ち第三卷(直茂公言行、五十八節)第四卷(勝茂公言行、八十一節)第五卷(光茂公綱茂公等年譜並言行、百四節)第六卷(御國古來の事、百九十九節)第七、八、九卷(武勇奉公方御國諸士の褒貶、夫々五十三節、八十六節、四十一節)第十卷(他家の噂並由緒等、百六十四節)の八卷は一三六、一三七、一三八の三節を除くの外はすべて之を省いた。之らの諸卷は極めて豊富な具體的事例の集成によつて、當時の士風を髣髴させるものがあり、かくて先生の教訓に對して謂はば裏打ち、肉付けをも爲す可き地位にあるものであ

らうが、葉隠の世界の肝要の骨組み丈は恐らくは先の三卷に盡きようか。
なほ先生の自著「愚見集」所謂「山本秘書」及び「餞別」については、抄録葉隠本文と
相應し、その味讀を特に扶くと思はるる箇所限り抄録の上、本文中参照
せらるべき箇所の次に一字下げて組入れることとした。先人の書を濫りに
啄析した罪はまことに遁れ難い。

一、その三卷の中から百三十八節(全卷約千三百節のほゞ十分ノ一に當る)を選
んでこの私抄を編んだ。その抄録に際しての態度については、及ばずながら
も私かに先生の精神を忖度して専らこれに従ふに微力を盡したが、それと
ても私抄者の解しうる限りを超えることは所詮は不可能事である。取捨宜
しきを得ぬ謗りはもとより之を甘受せねばならぬ。(卷末に附した蛇足はこ
の抄録の態度をもまた自ら物語ることになるであらうか。)

一、なほ二三の變更を敢へてしたところがある。即ち

- イ、検索の便に具へて新たに順を遂ふて抄録各節に番號を附した。
- ロ、二三の節内に於いては意味の段落に従ひ新たに行を改めた。
- ハ、所々に於て新たに濁點を附し又やゝ難讀の語には私見によつて右側
に讀假名を加へた。
- ニ、註解は簡易を旨とし且つ最小限に限らうとした。その中序節の註解は
殆ど中村郁一氏編「鍋島論語葉隠全集」、栗原荒野氏著「葉隠の神髓」の兩書
の解説に據つて居る。明記してゝ禮を申し上げ度い。

昭和九年四月

角 田 貫 次

しるす

葉隱 第一卷 抄

序

古へ義を以て死に殉ふ事情に感じて志のせむればなり今何ぞ是を禁じて操をくじけるや

夫れ義士は國の幹なり世々これを失はば嗣君何にかよらんなくさまね世にしばし君を輔けたらんは三世の義士ならん是れ其の禁ずるところにして永く此の事の止りし所なり

爰に又禁をとれば志みたずとらざれば禁に害す兩端に一の道を行ひ唯其の程の身を方袍圓頂にまかせてあるともなくなきにはあらぬ影法師分け入る跡は雲埋み千丈雪を凌いで松寒き朝覺むる間の假寢の庵かばかりに構へしは誰ぞや常朝居士なり居士此の道の人にてい

とたふとくぞ覺えける岩がね傳ひ小笹をわけて尋ねまうで登りしは
彌生のはじめなり

憂世から何里あらふか山櫻
古丸
白雲や只今花にたづねあひ
期醉

(漫草 松盟軒主)

註 (一)佐賀藩主鍋島四代光茂公は元禄十三年五月病を以て逝去された。九歳の時から公の御側に勤めてゐた山本常朝は直ちに主君の跡を追つて追腹する覺悟であつたが、本文中にあるやうに、佐賀藩に於てはその約四十年前から追腹は嚴禁されてしまつたので、已むなく剃髮出家し城北三里の佐賀郡金立村黒土原に草庵を結んで隱遁し、後再び世に出でなかつた。それから十年を経て、佐賀藩士田代陣基がこの風格を慕つて初めてこの草庵に常朝を訪ひ(當時常朝五十二歳、陣基三十三歳)深く感ずる所あるまゝに爾來常朝の談話の手記を中心として編纂して行つたのが即ち葉隠である。常朝は正徳三年十月公の内室靈壽院の墓所を憚つて同村大小隈に庵を移したが、その談話はこれらの草庵に於て物語られたものである。全十一巻の脱稿は享保元年九月十日(紀元二二七六年、二百十八年前)で前後足掛七ヶ年を費してゐる。この漫草は陣基松

盟軒主が此の間の消息を誌してその巻頭に附したもので、葉隠全巻の序文とも見るべきであらう。なほ文末の句はその初參會の時の問答句である。

(二)山本常朝先生は萬治二年六月十一日佐賀片田江横小路に生れた。幼名松龜、通稱神右衛門、名は常朝、剃髮して後は旭山常朝と號した。親、神右衛門重澄七十歳の時の子である。九歳で光茂公參勤の御供をし、後、小々姓、御側役、御歌書方等を勤め、公老後唯一の趣味であつた歌道幹旋のため元禄八年京都役を命ぜられ、公の師事された三條西大納言實教卿との間を往來し古今傳授について幹旋大いに努め、同十三年公臨終の際その巻物を持歸つて公を喜ばせた。五月十六日公逝去するや翌日髪を剃り、十九日高傳寺住職了意和尚に依つて戒を受け、七月九日に至つて城北の草庵に移り、享保四年十月十日大小隈の草庵で歿した。享年六十一歳。先生は若くして石田一鼎先生の薫陶を蒙り、又湛然和尚に師事して二十一歳の時その血脈を受けてゐる。この二人の感化が先生の一生を決するについて最も決定的であつたと思はれる。武藝に達し兼ねて和歌俳句にも堪能で、古丸とはその俳名である。寶永五年養子吉三郎のために自ら「愚見集」を書いて奉公の心得を論じ、世に「山本祕書」と稱せられるもの。先生時に五十歳、田代陣基との初參會に先だつこと二年である。次いで正徳五年又同じく「錢別」一章を書いて與へた。更に正徳四年川久保邑主神代主蔭に王道に關する書置一卷を書いて献上

した。この私抄に依つても先生のゆかしくも強烈な鍋島魂の片鱗は偲びえよう。なほ先生について詳しくは、山本常朝先生（中島吉郎氏遺稿、中村郁一氏修補、佐賀市楠公通佐賀郷友社發行、定價三十錢）を参照せられたい。

(三) 田代陣基先生は延寶六年を以て生れた龍造寺新五郎胤明の落胤であるといふ。通稱又左衛門、名は陣基、期醉と號した。小左衛門宗修の子である。元祿九年十九歳の時侍に召し出され、藩主綱茂公の祜事を勤むること前後十四年、寶永六年御側役を免ぜられ、翌七年三月初めて山本常朝先生を黒土原草庵に訪ひ、その談話を筆記して葉隠の稿を起し始め、爾後は自らもその附近に居を定め、屢、先生を訪ね、享保元年に至つて之を脱稿した。山本先生に後れること二十九年、寛延元年歿、享年七十一歳。山本先生の尊い教訓も田代先生の異常な發心と努力の賜、この葉隠一書によつて始めて今日我々にまでも傳はるを得たのである。

一

御家來としては國學心掛くべきことなり。今時國學落ち目に相成り候。抑々國學の大意は御家の根元を落着け、御先祖様方の御苦勞御慈悲を明かにして、御長久の事を本付け申す爲に候。剛忠様の御仁心、御勇武、利叟様の御善根、御信心にて、隆信様日峰様も御出現相成り、御威力にて御家御長久、今が世迄無雙の御家にて候。今時の衆斯様の儀は、唱失ひ餘所の佛を尊び候事、我等一圓落ち着き申さず候。釋迦も孔子も楠木も信玄も、終に龍造寺鍋島に被官掛けられ候儀、これ無候へば、當家の風には叶ひ申さず候。如陸甲冑共に御先祖様を崇め奉り、御指南を學んで上下共に相濟み申す事に候。其道々にては、其家々の本尊をこそ尊み申し候へ。御被官ならば、餘所の學問無用に候。國學得心の上にては、餘の道も慰みに承る可き事に候。よくよく了簡仕り候へば、國學にて不足の事一事

も無之候今他方の衆より龍造寺鍋島の根元又龍造寺の領地鍋島の領地に成り候謂れ又龍造寺鍋島は九州にての槍突きと承り及び候が如何なる武功に候哉などと尋ねられ候とき國學を知らざる衆は一言の答も成まじく候(中略)

さて又御代々の殿様悪人之れ無く鈍智之れ無く日本の大名に二三とさがられしことは終にこれ無く候不思議の御家御先祖様御信心の御加護たるべく候又御國の者他方に差し出されず他方のもの入れ置かれず浪人仰せ付けられ候ても御國內に召し置かれ切腹仰せ付けられし者の子孫も御國內へ召し置かれ主従の契り深き御家に不思議に生れ出て御被官は申すに及ばず町人百姓に至るまで御譜代相傳の御深恩申し盡されざることどもに候されば斯様の儀を存じ當り何卒御恩報じにまかり立つべくとの覺悟を胸に極め御懇に召し仕はれ候ときは彌私なく奉公仕り浪人切腹仰せ付けられ候とも一つの御奉公と

六

存じ山の奥よりも土の下よりも生々世々御家を歎き奉る心入れ是れ鍋島侍の覺悟の要門即ち我れ等が骨髓にて候今の拙者に似合はざる事に候へど成佛などは嘗て願ひ申さず候七生迄も鍋島侍に生れ出て國を治め申す可き覺悟魂膽に染み罷り在るまでに候氣力も器量も入らず一口に申せば御家を一人して荷ひ申す志を出生申す迄に候
同じ人間が誰に劣り申すべきや凡そ修行は大高慢にてなければ役に立たず候我れ一人して御家を動かさぬとかからねば修行は物に成らざるなり

又藥罐道心にてさめ易き事これありされど夫はさめぬ仕様あり即ち我れ等が一流の誓願に

- 一 武士道に於ておくれ取り申すまじき事
- 一 主君の御用に立つべき事
- 一 親に孝行仕るべき事

七

一 大慈悲をおこし人の爲になるべき事

此の四誓願を毎朝神佛に念じ候へば二人力に成つて後へ戻らぬものなり尺蠖しゆくさむしの様に少しづつ先きへ先きへとニジリ申すものに候佛神も即ち先づ誓願を起し給ふなり (夜陰之閑談 寶永七年三月初而參會)

註 (一)龍造寺氏は天文十六年胤榮の代に至つて肥前國守護代となつたその嗣子隆信の子政家は天正十八年病により致仕したが其子高房は猶ほ幼弱であつたので隆信は彼に仕へて屢軍功のあつた鍋島直茂を養子とし國を擧げて直茂に譲つた直茂の繼母は即ち隆信の母で従つて直茂は政家の義理の叔父に當るのであるが爾後は専ら鍋島氏を稱した葉隠に關係ある兩氏の略系は

龍造寺家兼(爾忠公)—○—胤榮(泰盛公)—政家
鍋島清久(利叟公)—清房(日峰公)—直茂(泰盛公)—勝茂(興國公)—忠直(兼輪公)—光茂

(三) 平時 (四) 戦時 (五) 先生は既に出家の身で且つ五十二歳の老齡であつた。

武士たるものは武道を心掛くべきこと珍らしからずといへども皆人油斷と見えたり其の仔細は武道の大意は何と御心得候かと問ひかけられたるとき言下に答へ得る人稀なりその平素胸におちつきなき故なりさては武道不心がけのこと知られ申し候油斷千萬のことなり

(聞書の一教訓 以下七〇まで同様)

参照 奉公人は忠孝を盡すためばかりに生れ出でたと云ふことを眞實に知るべし忠孝と云へば二つの様なれども主に忠節を盡すが則親にも孝行なり然らば忠一つに極まりたり御譜代御影かかげの下に生れ御知行を拜領したる者が忠節を盡さずんば何としてか御恩を報じ奉らんや此の段は珍らしきことにあらず諸人皆知れることなれども眞實に知れる人は稀なるべし其の仔細は人來りて如何是れ奉公人の大意と問ひ又如何是れ武士の大意と問ひたるとき分別無しに端的返答を抜合する人は多くはあるまじく是れ平素埒の明

かぬ證據なりさりとは苦々しく油斷千萬なる事なり人生僅か五十年六十年の間なり況んや老少不定なれば延々にしては間に合はず今日より奉公を可抽と思ひつむるが忠臣の地盤なりさて如何様奉公するが忠節かと云ふに奉公の二字にて埒のあくことなり奉公とは公に奉ると書きたり則今身命を殿様に奉りて見よ早私と云ふものが一物もなくなるなり身命主君の物なれば主君を心の王と崇め奉りて御下知を受けて萬事をなせ十二時中行住座臥飲食談笑動足忠節ならずと云ふことなし御城に出で御前に出で役儀を勤むるばかりを奉公と云ふにはあらず則座大切の御被官一人出來せるなり是を名けて忠臣と云ふ則奉公の根本なり(後略)山本秘書 奉公根本 忠孝

三

武士道と云ふことは即ち死ぬことと見付けたり凡そ二つ一つの場合に早く死ぬかたに片付くばかりなり別に仔細なし胸すわりて進むなり若し圖にあたらぬとき犬死などと云ふは上方風の打上りたる武

道なるべし二つ一つの場合に圖にあたることのわかることは到底出來ざることなり我人共に等しく生きる方が萬々望むかたなれば其の好むかたに理がつくべし若し圖にはづれて生きたらば腰ぬけなりとて世の物笑ひの種となるなり此のさかひまことに危ふし圖にはづれて死にたらば犬死氣違ひとよぼるれども腰抜けにくらぶれば恥辱にはならず是れが武道に於てまづ丈夫なり毎朝毎夕改めては死ぬ死ぬと常住死身に成つてゐるときは武道に自由を得一生落度なく家職を仕果すべきなり

四

人に異見をして疵を直すと云ふは大切なる事にして然も大慈悲にして御奉公の第一にて候異見の仕様大いに骨を折ることなり凡そ人の上の善惡を見出すは易きことなり夫を異見するも亦易きことなり

大かたは人の好かぬ言ひ憎き事を言ふが深切の様に思ひ夫を請けねば力に及ばざる事と云ふなり何の益にも立ず只徒に人に恥をかかせ悪口すると同じことなり而も我が胸はらしに云ふと等しきものなりそもそも異見と云ふは先づ其の人の請け容るるか請け容れぬかの氣をよく見分け入魂ぢんになり此の方の言葉を平素信用せらるる様に仕なし候てよりさて次第に好きの道などより引入れ言ふなど種々様々に工夫し時節を考へ或は文通或は雑談の末などの折に我が身の上の悪事を申し出し言はずしても自然と思ひ當る様にか又はまづ其の人の善良なる行爲を褒め立て氣を引立つる工夫を碎き濁くとき湯水を呑む様に受け合せて疵を直すが異見なりされば殊の外なしがたきものなり年來曲まがなるものなれば大體たやすくにては直ならず我が身自身にも覚えありされば諸朋輩と日頃入魂にして曲を直ほし一味同心に主君の御用に立つところなれば御奉公大慈悲なり然るに恥を與へて

は如何てか直り可申哉

五

翌日の事は前晚より夫のみ案じ書付被置候是も諸事人より先にはかるべき心得なり何方に兼役にて御出の節は前夜より向様の事を萬事萬端挨拶時宜等の事迄案し被置候何かたへ御同道申候時分御咄に何方に參候時は先づ亭主の事を能思ひ入て行がよし和の道なり禮儀なり又貴人杯より呼ばるる時苦勞に思ひ行くは坐つき出来ぬ物なり偕々忝き事かな左こそ面白有べきと思ひ入て行きたるがよし惣て用事の外は呼ばれぬ所へ行かぬがよし招請に逢はば偕も能き客振かなと思はるる様にせねば客にてはなしいづれ其座のすべを前方より腹に入れて行くが大事なり酒などの事が第一なり立しほが入つた物なりあかれもせず早くも歸らざる様に有度きなり又常々の事にも馳走

杯しんしやくを仕過すも却つてわろきなり一度二度云ふて其上には夫を取持たるがよし不圖行掛りて留らるる時杯の心得も如是なり

六

凡そ酒宴の様子はいかにあるべき事なり心を付けて見るに大かた只飲むばかりなり抑酒と云ふは打ち上りきれいにしてこそ酒にてあれ氣が付かぬはいやしく見ゆるなり大概人の心入れのたけも酒の座にては見ゆるものなり公界ものなり

七

何某當時儉約を細かに仕る由申し候へばよろしからざる事なり水至つて清ければ魚棲まずと云ふことあり凡そ藻がらなどのあるにより其の蔭に魚はかくれて成長するものなり少々は見のがし聞きのが

しある故に下々は安穩なるなり人の身持なども此の心得あるべき事に候なり

八

甲某の屋敷を乙某(貴人)より所望に就き差出すべき旨申し達せられしかば甲某は移轉先きまで探ね出したるところに乙某より突然不用になりたる旨申し來りしかば甲某大いに怒り不届の由云ひ募り遂に乙某より詫ぶる事となり金子などつかはし漸く事濟みとなりし由笑止の事共なり凡そ人は他人より瞞されて負けて居るは元氣なきことと思ふものなりされど之とは事が違ふなりたとへ貴人たりとも一言も云はせぬ杯と云ふは別段の事なり是は損徳の事にして根本が陋劣なることなり夫を歴々に向ひ過言など申し候事無禮慮外と云ふものなり殊に金子など取り候へば却つて負なり以後の支つぎに成るべきなり

公事沙汰言分などと云ふ事は皆これ損徳の事なり損さへすれば對手はなきものなりこればかりはよしや勘忍したりともおくれにならぬ事なり智がほそきゆゑ見えず

九

神右衛門彌三郎へ色紙を書せける時紙一ぱいに一字書くと思ひ紙を書き破ると思つて書くべし字の善悪は夫者のすべき事なり武士はあぐまぬ一種にて事済むなりとて染筆せしめたり

註(二) 先生の父山本重澄(二) 風流人

一〇

今時の奉公人を見るにいかう低い眼の着けどころなり恰も掬摸の目遣ひの様なり只身の爲めの欲得か或は利發だてか又少し魂の落ち

着きたる様なれば身がまへをする許なり我が身を主君に奉り死しては幽霊となりて二六時中主君の御事を歎き事を調へて進上申し御國家を固むると云ふ所に眼を着けねば奉公人とはいはれぬなり上下の差別あるべき様なしされば此のわたりにギスと居すわりて神佛の勸めにも少しも迷はぬ様覺悟せねばならぬ事なり

一一

或人の咄に松隈前之享庵先生申候は醫道に男女を陰陽に當て療治の差別有事に候脈も替り申候然るに五十年以來男の脈が女の脈と同じ物に成り申候爰に氣が付候てより病の療治男の脈も女の療治に仕て相應と覺え申候男に男の療治をして見申候に其の驗し無之候偕は世が末になり男の氣おとろへ女同前に成り候事と存候是れは慥かに仕覺え申候事ゆゑ秘事に仕置候と申候由是れに付て今時の男を見る

にいかにも女脈にて可有と思はるるが多くあれは男なりと見ゆるは
まれなり夫に付今時少し力み申し候はば安く上は手取る筈なり(中略)
若き衆心得有度き事なり

一一一

六十七十まで奉公する人あるに四十二にて出家致し思へば短き在
世にて候夫に付難有事哉思はるるなり死身に決定して出家に成りた
り今思へば今時まで勤めたらば扱々いかい苦勞可仕候十四年安樂に
暮し候事不思議の仕合せなり夫に我等を人と思ひて諸人の取持に合
ひ候我心を能々顧み候へばよくもすましたる事に候諸人の取持勿體
なく罪も有るべきとのみ存じ候事に候

註(二) 序の註(一)(二)参照

一三三

心の問はばいかが答へんと云下の句程有難きはなし大かた念佛に
押並ぶべしと思はるる先は人の口に多く止まりてあるなり今時の利
口者と云ふは智慧にて外をかざり紛らかす事ばかりするなり夫れ故
純成る者には劣るなり純成る者は直なり右の下の句にて心を究めて
見れば隠所はなきなり能き究役也此究役に逢ふて恥かしからぬ様に
心を持度なり

なき名ぞと人には云ひてすぎなまし心のはばいかがこたへん

一四

直茂公の御壁書に大事の思案は軽くすべしとあり一冊の註には小
事の思案は重くすべしと致され候凡そ大事と云ふは二三ヶ條ならで

はあるまじく候是は平生に詮議して見れば知れてゐることなりこれを前以て思案し置いて大事のとき取出して軽くすることと思はるるなり平素は不覺悟にして其の場に臨んでむつかしく分別することもなりがたく圖に當ることは甚だ少しされば平素地盤を堅固に据ゑ置くが大事の思案は軽くすべしと仰せられ候個條の基と思はるる事なり

註(一)石田一鼎先生は寶永六年を以て生れた。名は宣之、幼名は兵三郎、通稱神左衛門、後に安左衛門と改めた。父を失つた爲に十七歳にして家を嗣ぎ、祿二百石を賜つた。やがて勝茂公の近侍となり公の信任厚く、明暦三年には公の遺命によつて光茂公御側役となり、爾後公を輔佐すること年あつたが、寛文二年公の勘氣に觸れて松浦郡山代郷に貶謫された。幽居八年の後同九年許されて歸り、城北の佐賀郡梅野山下田に移つて閑居し、自ら下田處士と稱し、風月を楽しみ、詩文を友とする。傍子弟を教育し、武士道の鼓吹に力を致した。延寶五年剃髮して一鼎と號し、元祿六年十二月享年六十五歳を以て歿した。先生は少きより儒佛の學を究め、經史に通じ、遠近の僧俗の來り學ぶもの多く、山

本先生もその門に出でてゐる。その資性剛直にして高潔、その生活も簡素を極めた。著書に泰巖公譜、日峰公御壁書二十一ヶ條註、武士道用鑑抄、梅山遺稿等がある。大正四年十一月十日、大正天皇御即位御大禮に當り、特旨を以て位記を賜はり、正五位を贈つて先生の子弟、薰陶の功を追賞せられた。

一五

宗智寺和尚江南坊は美作守殿や石田一鼎などの學問仲間なり、面談のをり申され候は各は物知りにて結構にて候されど、道にうときことは平人にも尙ほ劣るなりと、其の時一鼎申され候には、聖賢の教の外には道はあるまじくと、然るに江南申され候は、凡そ物知りが道にうときは、事は例へば東に向つて行くべき筈の者が西に向つて行くがごとし、物を知るほど道には遠ざかるなり、其の仔細は昔の聖賢の言行を書物にて見覚え話にて聞き覚え見解高く成り申し、早や我身も夫に成りたる様に思うて平人を蟲ケラの様に見なすなり、是れ道に疎きところなり

道と云ふは何も入らず只我が非を知ることなり一念一念に非を知つて一生打置かざるを道と云ふなり聖の字をヒジリと訓むは非を知り給ふ故に非知りなり佛は知非便捨の四字を以て我が道を成就すと説きたまふなり心に心をつけて見れば一日の間悪念興ること數限りなきものなり故に吾はよしと思ふことはならぬ筈なりと申され候に付一鼎はこれにて得道されし由なり然れども武邊は別筋なり大高慢にて吾は日本無双の勇士と思はねば武勇をあらはすことはなり難し武勇をあらはす氣の位これあるなり 口傳

參照 (前略) 日本一の剛の者熊谷次郎直實と毎度我れを名乗り候是れよき手本と存じ入り候より力を得たることにて(中略) 若年の時より氣付け申したることに候(後略) (山本秘書 奉公根本 武勇)

何某喧嘩打返しせぬ故恥に成りたり打返し仕様は踏込むて切殺さるる迄なり是にて恥に不成也仕課すべきと思ふ故間に合はず相手は大勢杯と云ふて時を移し終に止めになる相談に極る也相手何十人もあれ片端より撫切りと思ひ定めて立向ふ迄に候が成就也多分仕濟す物なり又淺野殿浪人夜討も泉岳寺にて腹切らぬが落度なり又主を討せて敵を討つ事延々也若し其中に吉良殿病死の時は残念千萬なり上方衆は智慧かしこき故褒めらるる仕様は上手なれ共長崎喧嘩の様は無分別する事はならぬなり又曾我殿敵討も殊の外の延引幕の紋見物の時祐成圖を迦したり不運の事なり五郎申様見事也惣て斯様の批判はせぬものなれ共是れも武道の吟味なれば申す也前方に吟味して置かねば行當りて分別出来合ひ不申候故大かた恥に成候咄し聞覚え物の本を見るも兼ての覺悟の爲なり就中武道は今日の事も知らずと思ひて日々夜々に箇條を立て吟味すべき事なり時の行掛りにて勝

負はあるべし恥をかかぬ仕様は別なり死ぬ迄也其場にて叶はずば打返しなり是れには智恵も業も不入なり曲者といふは勝負を考へず無二無三に死狂ひする計りなり是れにて夢が覺る也

一七

奉公人に疵の付く事一つあり富貴になりたるなり逼迫にさへあれば疵は付かざるなり

又何某は利口者なるが人の仕事の非が目にかかる生れつきなり此の位にては立ちかぬるなり世間は非だらけと始めに思ひ込まねば多分顔付きが悪しくして人が請取らぬものなり人が請取らねば如何様のよき人にて本儀にあらず是も一つの疵と覺えたるがよし

一八

五六十年以前迄は士は毎朝行水月代髪に香をとめ手足の爪を切つて輕石にてすりこがね草にてみがき懈怠なく身元の嗜を專一とし尤も武具一通は錆を付けず塵埃を拂ひ磨き立て召し置き候身元をわけて嗜み候事伊達の様には候へども風流の儀にては之なく今日討死今日討死と必死の覺悟を極め若し無嗜みにて討死いたし候へば平素の不覺悟もあらはれ敵に見限られ不心得の程賤しまるものなれば老若共に身元を嗜み申したる事にて候事むづかしく隙費ゆる様の心地せんも武士の仕事は箇様の事にて別に忙はしき隙入ることも無之常住討死の仕組にて得と死身に成り切つて奉公もつとめ武邊も仕り候はば恥辱あるまじくさるを其の心掛なくして欲徳我が儘ばかりにて日を送り行きあたりては恥をかきそれも恥とも思はず我が身さへ快くば何も構はずなどと放埒無作法の行跡に成り行くは返すくも口惜しき次第にて平素必死の覺悟之れ無き者は必定死場悪しきに極り

候平素必死に極め候はば何とて賤しむべき振舞あるべきやされば此のあたりよくよく工夫仕るべき事なり (後略)

一九

奉公人は二六時中氣をぬかさず常住主君の御前に公界に罷り在るときの際にするものなり休息の間にもウカと成つてはそれだけ公界にてウカと見ゆるなり此の氣の位在る事なり

二〇

短氣にてしてならぬこともあり氣ながくすれば時に或はよきをりの出来するものなりかかれれば先づ勘忍が第一なりされどここぞと思ふときは手早く躊躇なき様にしたるが能なり案じ廻して逡巡して却つて仕損ずることあり又初より一途に踏み破つてよきこともあり又

愛想も興も盡きて却つてよきこともあり斯様なるときは別して一言が大事なりしかし兎角氣をぬかさず度胸を据うる事が肝要なり

二一

上下によらず誰人にも己が身の分際を越えたることをするものは結局は卑怯卑劣なることをなすものにて下々は逃走をもするものなり (後略)

二二

武藝に貪著して弟子など取つて武士を立つると思ふ人多し骨を折つて術藝者になるは惜しきことなり藝能は只事缺かぬ分に習ふてすむことなり凡べて多能なるものは下劣に見え肝要なるものが疎略になるものなり

參照 劍術鐵砲弓馬軍法（註）方其の外のこと恥かしからぬ様に豫（註）ねてたしなむべし諸藝あながちに上手にならでもよし萬能一心なり上手に成り一藝に滯る者は多分藝者になるなり（中略）努めて藝能によることにてもなし師匠取つて稽古することにもなし此の工夫何より以ていそがしきことなり是を一國一人と云はるる様に修め得候が最上なり（後略）（山本秘書 奉公枝葉 藝能）

一一三

學問は能き事なれ共多分失出来るものなり江南和尚のいましめの通なり一行有る物を見ても我心の非を知るべきためにすれば其儘用に立つなり然れども斯様には成り兼るもの也大かた見解が高くなり理好きになるなり

註（一）一五參照

一一四

人の難に逢ふたる折見舞に行きて一言が大事の物也其人の胸中が知るものなり兎角武士は（註）しほたれ草臥れたるは疵なり勇み進みて物に勝ち浮ぶ心になければ用に立ざる也人を引立てる事有之也

註（二）しほれる

一一五

萬の藝能も武道奉公の爲にと心に構へてすれば用に立つものなり然らざれば多分藝好きに成るものなり學問抔就中あやふき也

一一六

中道は物の至極なれ共武邊は平生にも人に乗越へたる心にてなくしては成るまじく候（中略）軍陣にては武功の人に乗越ゆべきと心掛け強敵を可討取と晝夜望みを掛くれば心猛く草臥もなし武勇も顯はず

由老士の物語なり平生にも此の心得可有之なり

三〇

二二七

鐵山老後に云ひけるには凡そ組打ちの際は一旦下になつても後に勝ちさへすればよろしき事の様なれど近年思ひ當り候は一旦下になりなば如何なる機會にて負けとなるやも計りがたくされば始めより勝ちたるが眞の勝ちにて始終の勝となるものなりと

二二八

決定覺悟薄き時は人に轉せらるる事あり又集會咄の時分氣ぬけて居る故に我覺悟ならぬ事を人の咄抔するにウカと移りて夫れを同意に心得挨拶もいかにもと云ふ事有り脇より見ては同意の人の様に思はるる也夫れに付人に出會ては片時も氣のぬけぬ様に可有事なり其

上咄又は物を申掛けられ候時は轉せらるまじきと思ひ我胸にあはぬ事ならば其趣申すべしと思ひ其事の發端を可申と思ひて取合ふべし差したる事にてなくても少しの事に違却出来るもの也心を付くべし又兼て如何と思ふ人には副寄らぬがよし何としても轉せられ引入れらるるものなり爰の髓に成る事は功を積ねばならぬ事也

二二九

藝は身を助くると云ふは他方侍の事なり御當家の侍は藝は身を亡ぼすなり何にても一藝有之者は藝者にて侍にあらざ何某は侍なりといはるる様に心掛くべき事なり少しにても藝能あれば侍の害に成る事と得心したる時諸藝共に用に立つ也此當り可心得事也

三〇〇

三一

風體の執行は不斷鏡を見て直したるがよし是は秘藏の事なり諸人鏡を能く見ぬゆゑ風體あしく口上の稽古は宿元にての物言ひにて直す事なり文段の修行は一行の手紙も案文する迄なり右何れも閑かに強み有るが能き也

又手紙は向様にて掛物に成ると思へと了山上方にて承り候由

參照 一 風體口上手跡にて端的人の上は手取なり(儀別)

奉公人の藝能は第一は口上なり如睦甲冑共に口上を詳に云はねばならず端的常用なり昔より一に口上二に物書と云ひ傳へたりと時の人餘の藝は精を出し稽古すれども口上のことは目落しになり油断して居ると見えたり口上と云ふものさりとてはむづかしきものにて十分云ひこなすことは中々なりさうにもなく思はれしなり何と合點して云ひ習ふべきかと工夫して見候に音聲吟響色句節拍子調子箇様の事あるべしと思ふなり功者の衆に尋ねべし口上を心掛くる人は謠をうたへと申し傳へたりまづ耳近く今茲に口上の云ひ様を申すならば口上は靜に押し靜づめ理を正しく手短かく無理の言一言

も言はざる様たしなむべし口上と云ふは使者の取合(三三)か披露事の時かなどと覺へてゐる人多しされど只今平素の物云ひのことなればよく詮議すべし

次に物書くことなり是亦一口に云ふ時は口上と同じ物を書くには靜におししづめ理を正しく手短かく無益の字一字を書かざる様にたしなむべし書札と云へば他方の衆の取合か言上御請の時など文書も吟味することの様に覺えて居る人多し只今不斷心やすき衆と手紙取やりのときたしなむことなり書かて済むことならば何とぞ口上にて済ますべし書きたるものは末々まで残る者なり證據にもなることなり無調法なることを書き出し恥かき後悔すること多し慎しむべし

註 (一)風采態度 (二)應對

三一

何某が云ひけるは凡そ浪人などと云ふは難儀千萬此の上もなきものの様皆人思ひて浪人などするをりは殊の外落膽して失望するなり

されども一旦浪人して後は左程にはなきものなり所謂案ずるより生むが易きなり死の道も同様なり平生に死を覺悟して心のどかに死すべきことなり災難は前方より杞憂したる程にはなきものなりさるを先づ以て如何あらんなどと杞憂して苦しむは愚かなる事なり奉公人の打留めは浪人かさもなくば切腹と定まりたる事と平素心得覺悟し置くべし

參照 (前略) 奉公人の打留め^しべりは浪人切腹に極まりたり其の身一代は恙なく勤めたりとも子孫の代に何れのがれざることと覺悟すべし (後略) (山本秘書 奉公根本 忠孝)

註 (二)以下の三句は故空閑少佐が平生精讀されたその所持本に特に朱點を施された會心の箇所であるといふ。(中村郁一氏編前掲書、五七三頁)その旨を讀者に傳へ、並せて少佐の辭世中一首を掲げて謹んでその最後を偲ぶ。
たらちねの親の教を守りてぞ弓矢の道を我は行くなり

役儀を險呑に思ふは^二スクタレ者なり其の事に備へたる身なれば其の事にて仕損ずるは當然のことなり但し私の事にて仕損ずること辱にてあるなれされど無調法にて何と相勤まるべきやとの心づかひはあるべきなり

參照 (前略) 或人子供への意見構へて利發にあるべからずたはけたるがよし利發なれば必身上を崩すなりと申されきそは金言なりとて面白がる人多し小欲にして望なき人は大形右の合點にて引込ずきになりそろそろ病氣を作り大役などあたらぬ様にして次第に子供にゆづり其の身は北山^三に屋敷を求め引き取りたる衆多し大欲人の物のほしさに精を出し勤め過ぐるに較ぶればよろしき様なれども畢竟身上崩すことの恐ろしさに引取りたるが所存なれば是は身を思ふにげ尻なり (後略) (山本秘書 奉公根本 忠孝)

註 (一) ヘコタレ者意氣地なし (二) 佐賀市の近郊

人の心の厚薄を見んと思はば煩へと云ふことあり日比は懇意にして寄り合ふものが一旦病氣災難等の際には疏略にして取り合はぬ者は腰抜けなり凡べて人の不幸變事の際はとりわけて立ち入り世話を焼くべきものなり恩を受けたる人には一生疏遠になすべからず斯かることより人の心の中は見ゆるものなり我が難儀のをりは人を頼み後には思ひも出さぬ人多しよく慎むべきことなり

諸岡彦右衛門用事有之由にて召寄被_レ申聞候一通の事神文と被_レ申候得共侍の一言金鐵より堅く候自身決定の上は佛神も被_レ及間敷と申候て神文相止候二十六歳の事也（辨財公事極意の事）

風體の執行には不斷鏡を立見候て直したるがよし十三歳の時髪を御立させ被_レ成候に付て一年計り引入り居候一門衆兼々申候は理發成る面にて候間頓_レて仕損じ可_レ申候殿様別て御嫌ひ被_レ成候は理發めき候者にて候と申候に付て此節顔つき仕直し可_レ申と存立_レ不斷鏡にて仕直し一年過て出候得ば虚勞下地_レ今時わかり不_レ申と皆人申候是れが奉公の基かと存候理發を面に出し候者は諸人請取不_レ申候ゆりすわりてしかとしたる所のなくては風體不_レ宜也うやうやしく苦み有りて調子靜か成るがよし

参照 奉公人はまづ風體取出し容儀對話にて心を推し量り知らるるものなればたしなむべきことなり先づ第一禮儀を正しくすべし打見るより奥深くしかも重々しく何よりも美事に見ゆるものは禮儀なり我が身上よりも引き

下りておれおれしく手をさげ腰をかがめ下々にまで懇懃にすべしさて取出しは月額のすり様髪の結ひ様歩み様膝の立て様手の突き様禮の仕様顔持の様子眼の使ひ様物の言ひ様着物の着様帯の結び様袴の着様大小のさし様さて又衣装染色脇差の誘様に至るまで氣をつけ吟味すべきことなり畢竟若き者は伊達に蓮葉に見えぬ様になるだけ年更けて老々と見え物々しく強みのある様取出したるがよし老人は花々しくきれいに伽羅などこめ年若く見ゆる様に取り出したるがよきなり凡べて人は恭々しく威のある様に見え只今家老職にあつても疎忽なき様にしてなすべきこと肝要なり夫とて少しも面高くそんきに見えぬ様に禮儀を深くすべし人別つかはれたる時ばかりと思ひては内外二つになりてよろしからず宿に居る時も行住座臥一つ一つ氣をつけてたしなむが奉公人なり（山本秘書 奉公枝葉 風體）

三六

目付役は大意の心得なくては害に可成なり目付を被仰付置候は御

國御治め可被成爲にて候殿様御一人にて端々迄御見聞不被相叶に付殿様の御身持御家老の邪正御仕置の善惡世上の唱下々の苦樂を分明に被聞召御政道を御正し可被成ためなり上に目を付るが本意也然るに下々の惡事を見出し聞出し言上致す時は惡事たへず却つて害に成るなり下々に直成る者は稀れなり下々の惡事は御國家の害にはならぬもの也又究役は科人の言分け立て助かる様にと思ひて可究事なり是れも畢竟御爲なり

三七

武士道は死狂ひなり一人の殺害を數十人して仕かぬるものと直茂公も仰せられ候本氣にては大業はならず氣違ひになつて死狂ひするまでなり又武士道に於て分別出來くるときは早後るるなり忠も孝も入らず武士道に於ては死狂ひなり此の中に忠孝は自らこもるものな

大難大變に遭遇しても毫も動轉せぬと云ふはまだしきことなり大變大難に遭つては歡喜雀躍して進み勇むべきなりこれ一難關を越えたるところなり諺に水増されば船高しと云ふが如し 村岡氏御改め前異見の事 口達

名人の上を見聞して己は及ばざる事と斷念するは腑甲斐なきことなり名人も人なり我も人なり如何てか劣るべきと思ひて一度打向へば最早其の道に入りたるなり十有五にして學に志すところが聖人なり後に執行して聖人になり給ふにはあらずと一鼎申され候初發心時

辨成正覺ともあるなり

註 (二) 子曰吾十有五而志乎學論語 爲政 四

武士は萬事に心を付け少しにても後れになることを嫌ふべきなり就中物言ひに不吟味なれば我れは臆病なり逃げ申すべしおそろし痛しなどと言ふことあり夢にも寢言にもあくびにも出すまじき詞なり心あらん人の聞きなば心の奥も推しはからるものなり兼て吟味して置くべきなり

參照 (前略) 熊谷平山が一二のかけ佐々木梶原が宇治川の先陣など武勇の勝れたる咄の時誰も然様ありたし美しなどと云ふはよけれどさてもなるまじき事かと云ふ人あり是は耽とらとならぬと極まりたりかりそめの言葉も心より出づることなれば聞いてさへなるまじと思ふ人が實の時なるべきにあらず

聴づかしき事なり(後略) (山本秘書 奉公根本 武勇)

註(二) 平家物語 卷九 一二ノ驅 参照

四二

四一

一分の武邊を確と我心に極め置き疑なき様に覺悟すれば自然の時一番に選び出さるる事必定也是れは折節の仕形物言にて顯るるもの也別けて一言が大事也我心を披露する者にてはなし兼てにて人が知るもの也 口傳

四二

奉公の心掛をする時分内にも外にても膝を崩したる事なし物をいはず言はて不叶事は十言を一言で濟ます様にと心掛候也山崎藏人など如是也

四三

古人の詞に七息思案と云ふことあり隆信公の言に分別も久しくなれば(二)ネマルと仰せられ候直茂公は萬事(三)しだるきこと十に七つ悪し武士は物事手取早にするものぞとも仰せられ候凡べて心氣ウロウロしたるときは分別も埒明かず拘泥(四)なく爽快に凜としたる氣にては七息の中に分別すむものなり胸すわつてツツ切たる氣の位なり 口傳

註(二) 腐敗する、緩ゆる (三) 直茂公壁書二十一箇條の一、願溪法師の釋義に「物を氣遣し(五) 過ごして果敢行はざるをしだるきといふ」

四四

小理屈など合點したる者は頓て高慢の心を生じ一風變りたる者なと云はれては烏頂天になつて喜び我れ今の世間に合はぬ生れつき

四三

などと云ひて我れを此の上なしなど思ふは天罰あるべきなり何等の善き能ありても人の好まぬ性質の人は益に立たぬものなり御用に立つこと奉公することには好きて随分へりくだりて傍輩の下に居るを悦ぶ心入の者は諸人嫌はぬ者なり

四五

仕付方の口傳に時宜の二字をダテとよませ候伊達する心にてなれば時宜はならずとなり

四六

不義を嫌ひて義を立つることは成りがたきものなり然れども義を立つるを至極と思ひ一向に義を立つる故に却つて誤り多きものなり義より上に道はあるなり是を見つくること容易に成り難し高上賢知

なりこれより見るときは義などは細きものなりこは我が身に覺えたることならでは知れざるものなり成らずとも此の道に至るべき法はあるものなりそは人に談合なりよしや道に臻らぬ人にも脇より人の上は見ゆるものなり碁にさへも脇目八目と云ふが如く念々非を知ると云ふも談合にしくものあらず談話を聞き覺ゆるも書籍を見覺ゆるも我が分別を捨て古人の分別に付かん爲めなり

四七

凡そ諫言の道は我が身其の位にあらずば其の位の人に言はせて君の御誤り直る様にするが大忠なり此の階の爲に諸人と懇意にするなりそれを我が爲にするは追従なり一方は我等荷ひ申す心入からなり成程なるものなり

御家中に善き被官出来る様に人を仕立つるも忠節なり志の有る人には指南申すなり我持分を人を以て御用に立つるは本望なり

隠居當住父子兄弟仲悪しきはいやしき欲心より起るなり主從仲悪しきことなきが證據なり

浪人などして取りみだるるは沙汰の限りなり勝茂公の御代は七度浪人せざればまことの奉公人にてなし七ころび八起きと口付に申候由成富兵庫など七度浪人の由起き上り人形の様に合點すべきなり主

人も試みに仰せ付けらるる事あるべし

若き内に立身して御用に立つはノフチなきなり發明の生れ付きにても器量熟せず人も請取らぬもの也五十計りよりそろそろ仕上げたるが能きなり其中は諸人の目に立身おそきと思ふ程なるがノフチ有るなり又身上崩しても志ある者は私曲の事にて無之故早く直る也

參照 (前略) 扱て立身の仕様年若き内に俄かに出頭など致し候ては落度これある物なれば四十歳までの内はなるべく引取り居り候て四十歳以後段々立身をして本意を遂ぐべくと存じ候ひぬ(中略)いづれ奉公人は五十歳過ぎ候はでは分別も落ちつき申すまじく候

石田一鼎の申されしには奉公人の立身の仕様は(中略)功者は其の身をただしくして物を急かず心ながく氣力つよく我が役を尖せんに勤めて居れば我が上目の出頭人或は役替又は死ぬとか病氣するとか牢人するとかなどと色々變轉

する内に少しづつ上へニジリ上り終に時節到來して思ふ圖にいたりて奉公の本意を遂ぐる物なりと申され候もつともなることに候(後略) (山本秘書 奉公根本 忠孝)

註 (二)「能地なし亦は能事なしか效果なし無能なり。」

五二一

病氣杯は氣持から重く成る物なり吾れ老後御用に可立との大願有之故親七十歳の子にて影法師の様に有りしか共一機を以て仕直し終に病氣出ず俗淫事を慎み灸治を間もなく致し候なり是にて慥に覺え有蝮蛇は七度焼きても本體に返るといふ事有り我大願有り七生迄も御家の土に生れ出て可遂本望としかと思込み候也

五三

何事にても成らぬと云ふ事なし一念發ると天地をも思ひホガスも

のなり成らぬと云ふ事なし人がかひなき故思ひ立ぬなり力(三)をも入れずして天地を動かすと云ふも只一心の事なり

註 (二) ほがすは擗るの義思ひ通徹す (二) …… ちからをいれずしてあめつちをうごかしめに見えぬおに神をもあはれとおもはせおとこをむなのなかをもやはらげたけきものふの心をもなくさむるはうたなり…… (古今和歌集 紀貫之の序文)

五四

禮に腰折れず恐惶に筆つえずと申事親神右衛門常に申候當時の人禮がすくなき故ウツカリとも見え風體惡敷候わけへだてなく禮々敷きがよし又長座の時は始めと終りに深く禮をして中は座の宜きに隨ふべし相應に禮をすと思へば不足になるなり近代の衆は無禮調子早に成りたり

五五

奉公人は喰はぬ共空楊枝内は犬の皮外は虎の皮と云ふ事是又神右衛門常々申候侍は外めを嗜み内は費無き様にすべきなり多分逆に成る也

五六

藝能に上手といはるる人は馬鹿風の者なり是れは唯一篇に貪着する故なり愚痴故餘念なくて上手に成るなり何の益にも立たぬもの也

五七

四十より内は強みたるがよし五十に及ぶ頃よりおとなしく成りたるが相應なり

参照 一 閑暇の砌は馬弓茶の湯饒方などなすべし詩歌將棊等まだるきことは四十の内一向停止(鏡別)

五八

人に取合ひ咄などするは夫と相應がよきなり善き事とてあはぬ事を言ふは興無きものなり

五九

世に教訓する人は多し教訓を悦ぶ人は少し況して教訓に従ふ人は殆んど稀なり齡三十歳位にもなれば教訓する人もなしされば教訓の道ふさがりて我がままなる故一生非をかさね愚をまして身すたるなり故に道を知れる人にはよく馴れ近づきて教訓を受くべきなり

六〇

名利薄き士は多分エセものに成つて人をのしり高慢にして益に
立たず名利深き者には劣るなり今日の用には立たず

六一

大機は遅く成ると云ふ事あり二十年三十年して仕果す事にならで
は大功は無きものなり奉公も急ぐ心あるとき我が役の外に推参し若
し功者と言はれ乗り氣ざし苛察に見え候出来したて功者振をして追
從輕薄の心も出来後指ささるるなり修行には骨を折り立身する事は
人よりも引立てらるるものならては用に立たざるなり

六二

何事も人よりは一段立ち上りて見ねばならず然らざれば同じあた
りにゴドグドつきてガタヒシと當りあひになる故ハツキリとしたること
なし

何某身上崩しの事を諸人嘲り申し候故不苦事にて候不運にて残念
の事と申し候又御主人の御懇ごんごんも御だましにて候故難有も不存と申す
人候故扱てごんごん不當介の人かな志の深き者はだまさるるが一入嬉し
きものにて候と申聞け候なり

註(一) 愚圖つく(二) 不適任その器に非ずあてが外れた等の義

六三

(前略)討死したる時敵方へ死骸向いて居る様にと覺悟すべきなり

六四

若き時分残念記と名付けて其の日其の日の誤りを書き付けて見たるに二十三十なき日はなし果てなかりし故止めたり今も一日の事を寝て後案じて見れば言ひそこなひ仕損なひ無き日はなし扱ても成らぬ物なり利發任せにする人は了簡に及ばざることなり

六五

文庫より書物を出し給ふあけ候へば丁子の香致し候也

註 山本先生自身の言ではなくて先生の行狀を田代先生の書き加へられたものか。

六六

古老の評判に武士の意地を立つることは過ぐる程にするものなりよき加減に仕て置きたることは後日の評判に不足出来るものなり仕過ぎと思ひて仕たるとき迎れなしと承り候斯様の儀失念すまじきことなり

となり

六七

打ち果すとはまりたる事あるときたとへば直に行きては仕課せがたし遠けれども此の道をよぎりて行かんなどは思はぬものなり手延びに成つて心にたるみ出来る故大概は仕届けずされば武道は卒忽なれば無二無三に可然なり (後略)

註 (二) 決着する、きまる

六八

戦が身にかかりたる重きことは一分の分別にて地盤をすゑ無二無三に踏み破りて仕てのかねば埒明かぬものなり大事の場を人に談合しては見限らるる事多く人が有のままに云はぬものなり斯かる折が

分別入用なるものなり兎角氣違ひと極めて身を捨つるに片付くれば
濟むなり此の際よく仕ようと思へば迷が出来て多分仕損ずるなり多
くは味方の人此方爲を思ふ人より轉ばせられ引きくさらかさるる事
あり出家願の様なる事に候なり

六九

山崎藏人が見え過ぐる奉公人は悪しと云ひたるはまことに名言な
り忠の不忠の義の不義の當介の不當介のと理非邪正のわたりに心の
付くがいやなり無理無體に奉公に好き無二無三に主人を大切に思へ
ば夫にて濟むことなりこれはよき御被官なり奉公に好き過ぎて主人
を歎き過ぐして過ちあること有れども夫が本望なり萬事過ぎたるは
悪しき事と云へど奉公ばかりは好き過ぐしてあやまりたるが本望な
り萬事を捨てて奉公三昧に極まりたり忠の義のと言ひ立て上げたる

理屈が返すくもいやなり

七〇

昔の事を改めて見るに諸々有之決定されぬ事あり夫は知れぬ分に
て置きたるがよきなり實教卿御咄に知れぬ事は知る様に仕たる物
があり又自得して知る事もあり又何としても知れぬ事もあり是が
面白き事なりと仰せられ候奥深き事なり甚秘廣古（ひそひそ）の事は知れぬ筈な
り容易（やす）すく知るるは淺き事なり

註(一) 三條西大納言序の註(二)參照 (二) 廣古おほ昔し

葉隱 第二卷 抄

七一

奉公人の禁物は何事にて候かと尋ね候へば大酒と自慢と奢となる

べし不仕合の時は氣遣ひなし然れども少々仕合せよき時分此の三ヶ條危きなり人の上を見るにやがて乘氣さし自慢奢が付きて散々見苦しきものなり夫故苦を見たるものならでは根性すわらず若き中は随分不仕合せなるがよし不仕合せのとき草臥るるものは役に立たざるなり（聞書の二教訓 以下一一八まで同様）

七二

武士の大括の次第を申さば先づ身命を主人に篤と奉るが根元なり斯の如くして後は何事をするといへば内には智仁勇の三徳を備ふることなり三徳兼備など云へば凡人の及びもなきことの様なれども易きことなり智は人に談合するばかりなり量もなき智なり仁は人の爲めになる事なり我れと人と比べて人のよき様にするまでなり勇は齒がみなり前後に心付けず齒がみして踏み破るまでなり此の上の立ち

上りたることは知らぬ事なり扱て外には風體口上手跡なり是は何ぞ常住の事なれば常住の稽古にてなることなり大意は閑かに強み之れ有る様に心得べし此の分手に入りたらば國學を心掛け其の後に氣晴に諸藝能もならふべし思へば奉公などは易きものなり今時少し御用に立つ人と見れば外の三箇條迄なりと

七三

端的只今の一念より外は之れなく一念々々と重ねて一生なり此の所に覺えつけば外に急しき事もなく求むることもなく唯此の一念を守つて暮すまでなり皆人此の所を取り失ひ別に有る様にばかり存じて探促いたしここを見付し人なきものなりさてこの一念を守りつめて抜けぬ様になることは功を積まねばなるまじくされども一度たりつけば常住に無くても最早別の物にてはなし此の一念に極まりし

ことをよくよく合點せば事すくなくなるなり此の一念に忠節備はるものなり

七四

奉公に志有りて工夫修行など致候時多分高上に成到り過ぎ本を唱へ失ひ候唯何の合點も入らず世間並にして主を歎き奉公に好くまてなり本に立歸り勤めたるがよし尤も初めより此の心入にては役に立たず一通工夫修行して夫をさらりと捨て如此心得候事なりと

七五

古來の勇士は大概ソケものなりソケ廻りたる氣情故氣力強くして勇氣有るか此のあたり不審に候と尋ね候へば氣力強き故平生手荒くソケ廻り申すと相見え候さるに此方は氣力弱く候故ソケ候事は成ら

ざるなりよし氣力は劣り候も人柄は優り候ことに勇氣は別事なり此方無氣力故おとなしくしても死狂ひに劣るべき謂れなし抑々死狂ひは氣力の入用なることにてはなきものなり

註(二) あばれもの

七六

安田右京が盃の收め事を申ししごとく只仕舞口が大事にて一生も斯の如くあるべし客人の歸る時分など名残盡きぬ心得肝要なり然なきときは早あきて居たる様にて終日終夜の咄も無になるなり凡べて人の交りは飽く心の出來ぬが肝要なり何時も何時も珍らしき様にすべきなり是も少しの心得にて替はるものなり

参照 一 人間の一生は若きに極る一座の人にもあかれぬ様に (直茂公壁書 二十一箇條の二)

七七

此の事此の中にも承り候此の節の御咄如斯なり戀の至極は忍戀なり戀ひ死なん後の煙にそれと知れ終ひにもらさぬ中の思ひをかくの如きなり命の内にそれと知らずるは深き戀にあらず思ひ死のけだかきこと限りなしたとへ先方より斯様にてはなきかと問はれても全く思ひもよらずと云ひて只思ひ死に極むるが至極の戀なり廻り遠き事にては無く候や此の前是を語り候へば請合ふ者共ありしが其の衆中を煙仲間と申し候なり此の事は萬の心得にわたるべし主従の間など此の心にて濟むなり又人の陰にて嗜むが即ち公界にてのたしなみなり獨り居るくらがりにて賤しき舉動をなすはまことによるしからず又人の目にかからぬ胸の中に賤しきことを思はぬ様に心がけねば公界にて奇麗に見えず俄かにたしなみては垢が見ゆるものなり

七八

貴人老人などの前にて左右なく學文かた道德の事昔咄など遠慮すべし聞にくし

七九

上方にて花見提重あり一日の用事なり歸りには踏み散して捨つるなりさすがは都の心づきなり萬事仕廻口が大事なりと

八〇

武士たるものは武勇に大高慢をなし死狂ひの覺悟が肝要なり平素の心立て物云ひ身の取り廻し萬きれいと心がけ嗜むべし
凡そ奉公方は其の位に落ち着きたる人によく談合し大事のことは

そのことに構はぬ人に相談し一生の仕事は人の爲になるとばかり心得難務方を知らぬがよし

八一

權之允殿へ咄に只今が其の時其の時が只今なり二つに合點して居る故間に合はず只今御前へ被_レ召出是々の儀を其處にて言つて見よと被_レ仰付候時多分迷惑なるべし二つに合點して居る證據なり只今が其の時で一つにして置くといふは終に御前にて家老衆の前にて公儀の御城にて公方様の御前にもサツバリと云つて済ます様に寢間の隅にて言習ふて置く事なり萬事如斯なり夫に准じて吟味すべし鐘を突く事も公儀を勤むる事も同前なり斯様にセリつめて見れば日來の油斷今日の不覺悟皆知らるるかとなり

八二

(前略)武道は毎朝毎朝死習ひ彼に付け是に付け死んでは見死んでは見して切れて切れて置く一つなり尤も大儀にてはあれども爲れば成る事なり(後略)

八三

出し抜に首打落されても一働_ひは確_{しか}と成る筈にて候義貞の最後が證據なり心がひなく候て其の儘打倒るると相見え候大野道賢が働など近き事なり是は何かする事と思ふぞ唯一念なる武勇の爲怨靈惡鬼とならんと大惡念を起したらば首の落ちたる_{とて}死す筈にてはあらず

註 (一) 義貞今は叶はじとや思ひけん抜いたる太刀を左の手に取渡し自ら首をかき切つて深泥の中に藏_{かく}してその上に横つてぞ伏し給ひける……(太平記 卷二十 義貞自害の事)

二大野道賢火あぶりの事(中略)頓て檢視罷越し遠あぶりにて苦しみ候様に拵へ候へ共
 (道賢)少も動き申さず焼死候に付て火を取直し候へば眞黒に骸計見へ候が其儘檢
 視に飛かかり檢視の脇差を抜取唯一突に突殺し骸は忽灰に成候由(葉隠 第十卷)

八四

山崎藏人の話に見え過る奉公人は悪しと是れ金言にて候唯奉公に
 すぎたるが當介家職なり或は理非の穿鑿強く又は無常を觀じ隠者を
 好み濁れる世の中事繁き都などに見なし佛道修道にて生死を離れ詩
 歌を翫び風雅を好みなどする事をよき事の様に思ふなりこれは我が
 一身の安樂のみして心を淨く持つばかりなり隠居人出家など世外者
 はよしされど奉公人は第一の禁物にて此の如き者は皆腰ぬけなり武
 道奉公は骨を折り仕悪くき故逃れて安樂を好むものなり世間にて無
 學文盲にて奉公一邊に精を入れ又妻子以下の育てに心がくる者は一

生美事に暮すものあり奉公人にてありながら座禪をつとめ詩歌に心
 を寄せ境界を風雅に異風にする人は多分身上を持ちそこなひ無力に
 責められ俗にも亦僧にもあらず公家隠者にもあらずして見苦しき有
 様なり又一偏に傾かず家職の隙に氣晴し慰みに餘の事をするは苦し
 からずと申す事あり是れは障りまでにはなるまじく候さりながら家
 職一片に心がけ候へば曾つて少の隙もなきものなり隙のあるは未だ
 打ちまらざる故なりとまことに老功の士の一言は厚きことなり藏
 人年寄役の時分俳諧はやり殿中にて俳諧する人多く候へども藏人
 一人終に仕習ひ申されず御用濟候へば各は俳諧成され候へと申し候
 て歸り申され候隠居以後連歌三昧にて日を暮し申され候由

八五

奉公人は心入れ一つにてすむことなり分別藝能にわたれば事むつ

かしく心落ち着かぬものなり又業に御用に立つは下段なり分別もな
く無藝無男にて何の御用にも立たず田舎の果にて一生朽ち果つべき
かされど我れは殿の一人被官なりとの心をふり起し御懇にあらふと
も御情なくあらふとも御恩の忝なきことを骨髓に徹し涙を流して大
切に存じ奉るまでなりこれは安きことなり是れがならぬ生れ付とて
は有るまじく又此の如く思はれぬ事もなかるべけれど斯様の志の人
は稀なり只心の内ばかりの事なり是けだかき御被官なり戀の心の様
なる事なり情なき程つらきほど思ひを増すなり適々も逢ふときは命
を捨つる心になるものなり忍戀こそよき手本なれ一生云ひ出す事も
なく思ひ死する心入が深き事なり又自然偽に逢ひても當座は一入悦
び偽の顯るれば猶深く思ひ入るなり君臣の間も此のごとくなるべし
奉公の大意これにて埒明くなり即ち理非の外なるものなり(私に曰く
君臣の間と戀の心一致成る事宗祇註に見當り申し候)

八六

御側の奉公は可成差出でざる様にブラブラとして年を重ね自然と
御用に立つ様になければ物に成らざるなり一家の中の様なればなり
外様の奉公は夫にては追附かず随分迦なく心掛け上たる人の目にも
付く心持あるなり

八七

寫し紅粉を懐中したるがよし自然の時に酔覺めか寝起などは顔の
色あしき事あり斯様の時紅粉を出し引きたるがよきなりと

八八

歸り新參の時などはさても鈍になりたと見ゆるがよしシツカリ

と落ち付いて動かぬ位があるなり御譜代の忝なき有り難き御國なることは氣の付くほど御恩が重くなるなり斯様に行き當りて見れば浪人などは何氣もなきことなりこの主従の契より外には何もいらぬことなり斯の事はまだなりとて釋迦孔子天照大神の御出現にて御勸め候てもギスともすることにてはなし地獄にも落ちよ神罰にもあたれ此の方は主人に志立つる外はいらぬなり悪しくすれば神道の佛道のと云ひて結構な打上つた道理などに轉ぜらるるものなり神佛も右をわろしとは思召さるまじきなり

八九

興に乗じて口柄にて咄をもする事あり我心浮きて實なく脇よりも左様に見ゆるなり其の跡にて實儀なる事を見合せ咄すべし我が心に實が出来るなり軽く挨拶する時にも一座を見計りて人の氣に障らざ

る様少し案じてより申すべきなり又武道の方御國家の事に難を申す衆候はば愛想盡かしてシタタカに申すべし兼て覺悟可仕候由

九〇

剛臆と言ふものは平生にあてて見ては當らず別段あるものなり
御留居二度の口達

九一

大難大變の時も一言なり又仕合よきときも一言なり當座の會釋話の内も一言なりされば工夫して云ふべきことなりシツカリとするものなり慥かに覺えある精氣をつくし平素心がくべきことなり是はめつたに話しにくきことなり皆心の仕事なり心に覺えたる人ならでは知るまじきとなり

九二

人間一生は誠に纒の事なり好いた事をして暮すべきなり夢の間の世の中にすかぬ事許りして苦を見て暮すは愚なることなり此の事は悪しく聞いては害になる事故若き衆などへ終に話らぬ奥の手なり我は寝る事が好きなり今の境界相應に彌禁足して寝て暮すべしと思ふなり

九三

少し眼見え候者は我が長けを知り非を知りたりと思ふものなり夫は我が長けより上のよき人にくらべて我が長けを知りたりと思ひ仕損じたることに行き當つて非を知りたるなりと思ふ故なほく自慢に成る物なり實に我が長け我が非を知る事難きことなるもの由こ

れは潮音和尚の話

九四

打ち見たるところに其の儘其の人々の丈け分の威が顯はるる物なり引き嗜む處に威あり調子靜かなる處に威あり詞寡き處に威あり禮儀深きところに威あり行儀重き所に威あり齒がみして眼差尖なる所に威あり是れ皆外に顯はれたる處なり畢竟氣をぬかさず正念なるところが基にて候也

九五

(前略)志強く成る程夢中の様子段々變り申し候有體かたがひの例しは夢にて候夢を相手にして精を出し候がよきなり

詮議事又は世間の話を聞くときも其の理を尤もとばかり思ひてその邊りにグド付いては立ち越えたる理が見えず人黒と云はば黒き筈にてはなし白き筈なり白き理があるべしと思ひその事の上に理を付けて案じて見れば一段立ち上りたる理が見ゆる物なり斯様に眼を付けねば上手取ることならず扱其の座にて云ふべき相手ならば障らぬ様に云ふべし云はれぬ相手ならば障らぬ様に取り合ひして心には其の理を見出して置きたるがよし人に越へたる理の見ゆる仕様は此のごときなり(後略)

九七

主人にも家老にも年寄にもチト隔心に思はれねば大業はならず何氣もなく腰に付けられ候ては働かれぬものなり此心持有之事に候由

九八

春岳の咄に其處引くなと云ふままに二人張ると草紙にありこれが面白う候反的濟まぬことは一生埒あかず其の時一人力にてはなし難し二人力に成つて埒明くべし後になどと思へば一生の懈怠となるなり又左足を踏み鐵壁も通すと云ふも面白う候忽ち飛込み直に踏み破る事は一步の左足なり

又大機を得たる人は日本開闢以來秀吉一人と思はれ候由

九九

何某は第一顔の皮厚く器量あり利發者にて御用に立つ所もあり此の前其の方は利發は残らず外へ出て奥深き所なしチト鈍に成りて十の物三つ四つ内に残す事は成るまじきやと申し候へば夫は成り申さ

ずと申し候^(一)ホシメカシて公儀前などなさしむれば何處までも爲して行くところありさりながら御身邊^(二)國家篇^(三)重き事は少しもせさせられぬだけなり誰々と一風^(四)のものなり利發智慧にて何事も出来るものと覺えて居るなり智慧利發ほどキタナきものはなし先づ諸人不請取^(五)帶紐解いて入魂されぬものなり何某は不辨^(六)には見ゆれど實がある故立つて行く奉公人なりと

註 (一) 仄めかすおだて上げる (二) 篇は邊か國家に關する (三) 同趣 (四) 氣が利かぬ

一〇〇

殿參りするも奉公人の疵なり總べて御内縁殿御最負を以ては口のキケヌものなり折角骨を折りて奉公しても引きにて仕合せ能きなどと後ろ指をさされ奉公が無になるものなり何の引きもなきが奉公は仕よきものなり

一〇一

或人に異見申し候には身持ち心入れ今時の人に勝れ申され結構の事に候此の上ながら立ち上りたるところに眼を付け候へかし今の分にては惜しき事に候藝にすかれ候こと低い位なり若し名人に成り御用に立ち候とき先祖以來の侍を立て迦し藝者にならるることに候御國の侍は藝は身を亡ぼすと平素見立しは此處にて候尤も低い丈けにてはよきことならんも立ち上りたることと云ふは何某儀は武士なりさすがの奉公人なりと見られ御家老御用の時選び出さるることなりされば御無人の時は昔の科も消えて行くことなり御國家治め申し上ぐるの忠節何かあるべきやたとへ召し出されずとも一分の覺悟は已に御用に立ちたる事なり多分大事の時は潜に相談にまゐるものなり夫に指南申すはなほく忠義なり他事なきものなる故少々立ち上つ

たる者は人が捨て置かぬものなり此のあたりに眼を付け候へかしと申し、に夫は稽古にてなり申すべきかと尋ねられしに付きそは易いことなり當念に氣を抜かさず上は手の理を見出すまでなり少し精を入れなば慥になるものなり

又十日の中に國中に器量鳴り響く仕様もありと何和尚が平素話し候由彼の和尚は皆人恐れて居るなり上手の理が得方にて鳴り廻るところを覺えたる人なり明日にても何事ぞ申され候はば打ち崩し上手の理にて云ひ伏せ理詰せらるべく候故諸人肝を潰し云ひ傳へて頓て沙汰するものなりとかく大犬をかみ伏せねば響きなきものなりと申し候へば誠に利發なる和尚と申され候故左様に阻み申され候故大業がならず何の香ばしき事あるべきや誰にても一足もやるまじとかか
らねば矛手（中略）はのびず

又殿様の御上御家老御年寄衆などの上はたとへ上手の理を見付け

候ても人に批判せぬものなり聞えぬ事候ても御尤と理を付けて諸人思ひ付く様に褒め崇めて置くが忠義なり人の信ぜざる様にしなすは勿體なきことなり人の心は移り易きものにて一人褒むれば早や夫にかたぶき一人誹れば悪ろく思ふなり（後略）

一〇二

人の身の上の事を云ふは大きな失なり譽むるも似合はぬことなり兎角が我丈けをよく知り我が修行を精出し口を慎みたるがよし

一〇三

智慧ある人は實も不實も智慧にて仕組み理をつけて仕通すべしと思ふものなりこれ智慧の害になるところなり何事も實にてなければノフチなきものなり

一〇四

公事沙汰又は云ひ募ることなどに早く負けて美事な負けがあるものなり相撲の様なるものなり勝ちたがりてキタナ勝するは負けたるに劣るなり多分キタナ負になるものなり 上り屋敷の事口達

一〇五

夢の世とはよく見立なり悪夢など見たるとき早く覺めよかしと思ひ夢にてあれかしなどと思ふ事あり今日も夫に少しも違はざるとなり

一〇六

少し知りたる事は知りだてするなり是れ初心なる事なりよく知り

たる事は其の振見えず奥ゆかしきものなり

一〇七

權之允殿へ話に今時の若者女風になりたがるなり結構者人愛の有る者物を破らぬ人柔なる人と云ふ様なるをよき人と取はやす時代に成りたる故矛手延びずツツ切れたる事でならぬなり第一は身上を抱き留むる合點が強き故大事と計り思ひ心縮まると見えたり其の方も我知行にてなく親の苦勞して取立させられたる物を養子に來て崩し候てはならぬことと大事に思はるべきが夫は世上の風なり我等が所存は格別なり奉公する時分身上などは何とも思はざりしなり本より主人の物なれば大事がりて惜むやう無き事なり我等世の中に奉公方にて浪人切腹して見すれば本望至極なり奉公人の打留は此の二箇條に極りたる物なり其の内キタナ崩しは無念なりおくれ不當介私慾人

の害になる事などは有るまじき事なり其の外にては崩すを本望と思ふべし如斯落着候はば其の儘矛手延びて働らかれ勢ひ格別にて見事に候

參照 (前略) 崩す期に到つて少しも驚くべからず元來奉り置きたる此の身なればこれ奉公人のならひなりと觀念すべし有爲轉變の世の中天下も國家も一度は亡ぶ時節のあるものなり崩して御知行を返上申すも亦御奉公なり但し崩し様には品々あるべし卑怯なることにて崩すは無念なり後來名も耻かしく先祖にも面目なきことなればきれいなることにて崩し度きものなり(後略) (山本秘書 奉公根本 忠孝)

一〇八

奉公の志出来ぬも自慢故なり我れを善しと思ひ最負の上から理をつけ悪がたまりに堅まり一世帯構へて濟して居る故なり歎かはしき

ことなり分別藝能大身富貴器量發明など一つの取柄に自慢して我れはこれにて濟むと思ふより人に問ひ尋ねもせず一生をあらぬことに果すなり奉公の志と云ふは別のことなし當介を思ひ自慢をすて我が非を知つて何とすればよきものと探促して一生成就せず探促仕死に極まるなり非を知つて探促するが即ちとりもなほさず道なり

一〇九

何方へ咄などに行くには前方申し通じ候上にて行きたるがよし何分隙入可有も不知亭主の心懸りの所へ行ては興無きものなり凡べて呼ばれぬ所へは行かぬに如くはなし心の友は稀なるものなり呼ばれても心持入るべし稀の參會たらずはしまぬものなり慰講は失多きものなり又問ひ來る人にたとへ隙入るとも不會釋すまじき事なり

一一〇

恩を受けたる人懇意の人味方の人にはたとへ悪事ありとも密かに意見いたし世間にはよき様にとりなし悪名を云ひふさぎ譽め立て無二の味方一騎當千に成り内々にてよき様に意見すれば疵もなほりてよき者になるなり譽め立て候へば人の心も移り自然と悪沙汰止むものなり都べて慈悲門に据わり込みてよくなさねば置かぬと念願すべきなり

一一一

小利口杯にては物事すまぬものなり大きく見ねばならず是非の沙汰などむざとすまじき事なり又グナツキてはならず切る所は早く据つてツキ切りて埒明けねば武士にてはなきなり

註(二)ぐらつくふらくする

一一二

若年の時一鼎の申されしには其の方は末頼もしき器量になり我が死後には御家を偏に頼み申すなり大儀ながら御國を荷うて上げられよと涙を流して申し聞かされ候其の時不圖胸にこたへ此の一言が荷になり今に於いても未だかつて忘れ申さず斯様の詞始めて承はり候今時流行らぬ事にて候人に教訓するも身持心持嗜よく奉公仕り候へと申すが一番なり是れは我身の欲なりいかい行違ひなり斯様の一言最早言ふ人もあるまじ歎しき事のよし

一一三

皆人氣短故にて大事を仕損ずる事あるものなり何時迄も何時まで

もとさへ思へばしかも早く成るものなり時節が降り来るものなり今十五年先きを考へ見候へ扱も世間違ふべし未來記などと云ふもあまり替りたる事あるまじ今時御用に立つ衆十五年過ぐれば一人もなし今の若手衆が打て出ても半分だけにも有るまじ(中略)さすれば十五年すぎて丁度御用に立つなり十五年などは夢の間なり身養生さへして居れば終に本意を達し御用に立つ事なり名人多き時代こそ骨を折る事なれ世間一統下り行く時代なれば其の中にて抜け出るは安き事なり

一一四

功者の咄など聞くときはたとへ我が知りたる事にも深く信仰して聞くべきなり同じ事を十度も二十度も聞く中に不圖胸に請取る時節あるものなり其の時は格別のものになるなり老の繰言と云ふも功

者なる事なり

一一五

すてもものも盡くしたる者にてなければ用に立たず丈夫窮屈ばかりにては働なきものなりと

一一六

愚見集に書付け候事奉公人の至極は家老の座に直りて御意見申し上る事に候此の眼さへ付け候へば餘の事すてもものなどは免じ申し候扱々人はなきものにて候斯様の事に眼の付けたる者一人もなし適々私欲の立身を好みて追従仕廻る者あれども是は小欲にて終に家老には望みかけ得ず小魂こたましいの入らぬ者は利欲を離るると思ひて踏込みて奉公せず徒然草選集抄などを樂み候兼好西行などは腰ぬけスクタレ者

なり武士の業がならぬ故にぬけ風をこしらへたる物なり今にも出家
極老の衆は學びても可然候武士たる者は名利の眞中か地獄の眞中に
駆け入りても主君の御用に立つべきとなり

一一七

一鼎に逢て御家などの崩ると云ふ事は末代までも無之候仔細は
生々世々御家中に生れ出て御家は我一人して抱留め申すと申し候へ
ば大膽なる事を申すと笑ひ申され候二十四五歳の時の事なり卓本和
尙へ一鼎申され候は御國に變りたる者出來申し候昔耻しからぬと咄
し仕られ候を承り申し候出家物語なり

一一八

神は穢を御嫌ひなされるとあれど一分の見立てこれありて日物怠り

申さず候其の仔細は軍中にて血を切りかぶり死人乗り越へく働く
時分運命を祈り申す爲にこそ豫々は信心仕る事に候其の時穢あるな
どと後へ向く神ならば詮なきことと存じ極め穢も構ひなく拜み仕り
候

註(二) 日々の禮拜供物など

翌朝

手ごなしの粥に極めよ冬籠り

期 醉

朝顔の枯蔓もゆる庵かな

古 丸

葉 隱 第十一卷抄

一一九

物前にて遠慮すべからざる事 譬ば何がしあの塀を可乗あの責口

の先をすべしなどといはれたる時いかがあるべきなどと云べからず
心得たり乗べし寄べし其方得としあんをめぐらし分別を居え給へと
いふべし 心持口傳

是のみならず何事を云付けられたる時もそのまま畏るべし總て武
士の前疑は臆病の本と知るべし (雜 以下一三五まで同様)

一一一〇

やさしき武士は古今實盛一人なり討死の時は七十餘なり木村長門
守長髪に香をとめ討死仕られ候武士は嗜深くあるべき事なり香の留
様まづ湯氣にうたせて後に香を留むればよく留るなり下帯に香を留
べき事水風呂行水に焼物入候事扇に香を留候はひらきて湯氣にうた
せその後香の上にて一間づつ疊み候て召置申し候又扇の木口に丁子
油を引き候事火繩にて伽羅を焼は火より下に伽羅をはさみ置く也

註

(一) 齋藤別當さては互によき敵但和殿を下るには非ず存する旨あれば名乗る事は有
まじいぞ……良有て樋口次郎(兼光)涙を抑へて申けるはさ候へば其様を申上げんと
仕候が餘に哀に覺候て先不覺の泪こぼれ候けるぞや去れば弓矢とりは聊かの所に
ても思出の言をば兼て可使置事にて候けるぞや齋藤別當常は兼光に逢て物語し候
しは六十に餘つて軍の陣に向はん時は鬢髪を黒う染めて若やがうと思也其故は若
殿原に争て先を懸けんも長げなし又老武者とて人の侮らんも可口惜と申候が誠に
染て候けるぞや……又齋藤別當錦の直垂を著ける事も最後の暇申に大臣殿へ参つ
て……今度北國へ罷下候はば定て討死可仕候……事の譬の候ぞかし故郷へは錦を
著て歸ると申す事の候へば何か苦う可候錦の直垂を御免候へかしと申ければ大臣
殿優うも申たりける物哉とて錦の直垂を御免有けるとぞ聞えし……(平家物語 卷
七 實盛最後)

一一一一

討手など仰せられ候時の事 何方へまゐり居るとも自宅へは一足
も歸らず直に馳せ向ふべし又平日にても主君より御用との御呼び出

しを蒙りしときも同様なりされば武士は前廉まへらの覺悟嗜入り申すべき事なり

一一二二

忠節の事 一番乗や一番槍を幾度も仕るよりは主君の御心入れを直し御國御家を安固になさんと心掛け申すが大忠節なり一番乗一番槍などは命を捨てて懸るまでなり即ち其の場ばかりの仕事なりさるに御心入れを直す事は命を捨ててもならず一生骨を折るものなり先づ諸朋輩も請取主君も御請取候ものになりて御心易く御懇意を請け年寄家老役に成りたる上にてなければ諫言申す事不相叶此の間の苦勞難量事に候我爲の私欲の立身さへ骨折ことなりこれは主君の御爲ばかりに立身する事なれば中々精氣續き難き事なり然れども此の當り眼を付けずしては忠臣とは云ふべからず

一一二三

後悔の事 後悔ほど心苦しきはなしされば我れ人共に後悔なき様にありたきものなりされども我が身の仕合せよきときは氣乗さし又常にウカと氣乗して氣ぬけせしときなどは大かた顧慮せずして事をなし行き當つて後悔するものなりよくよく氣をぬかさぬ様且つは仕合せよき時分氣を鎮め可申事なり

一一二四

長濱猪之助物語の事 兵法の要は唯身を捨てて敵を討つべし對手も身を捨てて討つとき此の時なじめて對たがになるなり其の時勝つは信心運命にあり

又寢所を人に見すべからず寢靜まる時と明けはなるる時が大事な

り是を心懸くべしとなり

一一二五

生死を離るべき事 凡そ武士たるものは生死を離れざれば何事も役に立たず萬能一心と云ふも有心の様に聞ゆれども實は生死を離れたることなりここに至つて始めて如何様なる手柄もなさるるなり藝能などは道に引入るる縁迄なり

一一二六

中野神右衛門申し候は兵法など習ふ事無益なり唯敵前にては目を塞ぎ一足なりとも踏み込みて敵を討たねば役に立たざるものと心得べしと彌永左助も同前に申し候

一一二七

主君御大事の時家來として御命代に立たざるものは一人もあるべからずされども平素覺悟したるものはまれなり平素覺悟したるものは危急の場合に及ばゞ眞先に進み出で候續く者あるべからず佐藤繼信は奥州に罷在候時妻子に向ひ我君今度大軍に向はせ給はば御命危き事なり其の時我等御身代に立つべくと聞かせ最後の暇乞して罷立候由なり八島に於て義經御大事のとき末代迄名を残す歴々の郎徒命を惜む者あるべからずといへども兼ねての覺悟したる繼信に先を越したる一人もなし兼ねての覺悟仕たるもの一人も無之候ては危き事なり然らば兼て覺悟を極め御側近く相勤むべき儀なり繼信は羨しき士なり

外見恂潑なるものはよく他にぬけ出でたることをなしたりともさ
まで目立たず人並のことをなしては不足の様に見ゆるものなりさる
に平素柔和なるものの少し振よきことをなさば諸人ほめたたふるも
のなり

必死の觀念一日仕切りなるべし毎朝心をしづめ弓鐵砲鎗太刀先に
てズダ／＼に成り大浪にかきさらはれ大火の中に飛び入り雷電に打
ちひしがれ大地震にてゆりこまれ數千丈の崖に飛び込み病死頓死死
期の心を觀念し朝毎に懈怠なく死して置くべし古老の言に軒を出づ
れば死人の中門を出づれば敵を見るとなりこれ用心の事にあらず前

方に死を覺悟して置く事なりと

參照 武士は天下の守護人非道を禁じ非義を討ち忠を盡す役人なり武勇を
天下に顯はし先祖の名を擧げ名を後代に残す可しと眞實に決定すれば則今
日より究竟の武士一人出来るなり(中略)大變に動轉せざる様に常々覺悟すべ
しかねて大變の箇條を擧げ只今事に遭ひたる時の工夫肝要なり畢竟一命を
捨つるより外に大なることなしこれ大儀なることなし人間老少不定なり明
日の事も知られず然れば今日は／＼と覺悟して毎朝死を習ふべし(中略)毎朝
かくの如く觀念し軍神に運を祈るべし摩利支天は必ず守らんとのたまふ由
ありがたしとも頼もし武士は素より修羅道なれば修羅道を樂しみ獄にも落
ちよ奈落にも沈め鬼神を數多相手にして片はしより薙で切りにする氣象肝
要なり眼をすゑ牙をかみ拳を握り脊骨を押し立て躍つて出づる氣を斷えず
用ひ習ふべし腹の立つ時の氣は恐るる事もなく命のすたる事も思はずこの
時の氣が即ち勇氣なり是を常に用ゐるべし(後略)(山本秘書 奉公根本 武勇)

一三〇

人は立ちあがるところなければ物にならず人より頭を踏まれグヅグヅとして一生を果すは口惜しき事なりまことに夢の間なる世なればハツキリとして死に度きことぞかし此の點に眼の付く人は稀なり世に時めき飛ぶ鳥落とす勢のある人とて天魔鬼神にてはあるまじく彼も人なり我れも人なりされば少しも劣り申すべきか若し誰々に乗越さずんば腹搔き切つて死ぬべしとツツ立ち上れば即座に上手になるものなり功を積みてからなどはまだるし一念發起すれば則ち立ち上がることなり斯様にツツ切つて踏み破ること成がたく志は有つても何やかや取付きて埒明きがたき時もあり左様のときは手に握吹毛劍所觸着無不剗却と云ふ句等を力にすべしと

一三一

大行は細瑾をかへりみずと云ふことあり奉公無二の忠節を盡しなば餘のこと疎にしてもたまには我が儘いたづらも苦しからず何もかも落度なく揃ひなば却つて見にくき處あり多分肝要のものが薄くなるものなり大業をするものは餘裕がなければならざるものなり(後略)

一三二

矢違守の事 敵の矢向やうに中る間敷と思ふ者には加護なし雜人輩の矢に中らず名ある者の矢向にかかるべしと思ふ者には守護願の如く有之由なり

一三三

安藝殿子孫軍法不承様にと申され候事 戰場に臨んでは分別が出來て何としても止められぬものなり分別ありては突破る事ならず無分別が虎口前の肝要なり夫に軍法など聞込んで居たらば疑多く成りなかなかに埒明き申すまじく候我子孫軍法稽古仕まじくと被申候由
註(二) 小口前か一人前の盡し分

一三四

或る大將の云ふに物頭外の士共具足をタメサば前ばかり試すべき由
又具足の結構は用あるべからず甲はよくよく吟味すべし首に添へて敵方に持行くものなり

一三五

古老の士上は髭さがり捻ぢ候事は陣中にて首を取り候印に鼻耳をそぎ候節男女の紛れ之なきため髭さがりを加へそぎ候なり其時髭さがり無之首は女に紛れ候故打捨て候死後に首を捨られざる様にとの嗜なり(常住毎朝水にて顔を洗ひ候へば討死の時顔色變ぜずといへり)

一三六

堪然和尚平生の身に出家は慈悲を表にして内には飽くまで勇氣を蓄はへざれば佛道を成就すること能はざるものなり武士は勇氣を表にし内には腹の破るるほど大慈悲心を持たざれば家立たざるものなりこれに仍つて出家は武士に伴つて勇氣を求め武士は出家に便りて慈悲心を求むるものなり我れ數年の遍歴に智識に逢つて修行の便に成りたること一つもなしされば所々にて勇士とさへ聞けば道の難易遠近をも問はず尋ね行き武道の話しを聞きしが是れにて佛道の助け

と成りたること確かに覚えあり先づ武士は武具を持つに依りて夫を力にしてなりとも敵陣に斬り込むなり出家は珠數一連にて槍長刀の中へもかけ入ることこれ柔和慈悲の心ばかりにて何として出來うべきや大勇氣なくしてはかけ入らるるものにあらず其の證據には大法事の時焼香する和尚などが震はるるなり勇氣なき故なり蘇生の死人を蹶倒し地獄の衆生を引上ること皆勇氣の業なり

然るに近代の出家皆あらぬ事を取持ち殊勝柔和になりたがり道を成就する事なし剩へ武士に佛道を勧めスクタレ者に仕なすこと残念の事共なり若年の侍などの佛道を聞くはまうてのほか以外の僻事なり仔細は物が二つになる故なり一方向きにてなければ役にたたぬものなり隱居閑居の老人などは遊び仕事に佛道を聞くもよし武士たる者は忠と孝とを片荷にし勇氣と慈悲を片荷にして二六時中肩の割り入る程荷ふてさへ居れば侍は立つなり朝夕の禮拜行住座臥殿様殿様と唱ふべし佛

名眞言に少も違はざるなり

又常に氏神に釣合ふて居るべし運強きものなり

又慈悲と言ふ者は運を育つる母の様なものなり無慈悲にして勇氣ばかりの士斷絶の例古今に顯然なりと(第六卷)

註(一)湛然梁重和尚蓋し當時の傑僧である鍋島家菩提寺高傳寺第十一世住持であつたが、寛文六年中ノ館圓藏院住持村了和尚が寺格昇格の事で藩主光茂公に直訴し死罪に處せられた時、命乞をして公に容れられなかつたので憤然寺を去つて佐賀郡松梅村松瀬通天庵に入り、藩主再三の勸説を拒絶して遂に出でず、同地に華藏庵を建立し高傳寺の末寺として十石を扶持せられ、此處に隱遁して延寶八年十一月十日入寂した。山本先生との關係は既に序の註(二)で略述した。佛敎も日本化される時少しも武士道と相容れぬものとは成らず却つてその純化を助けて作用することのすぐれた一例であらう。

安藤道古物語の事 (前略)人の身に大切なる物は氣味合なり命などは散て行ものなり

又日本に佛法弘まり近年は俗人も佛法に心懸るなどと云て取はやし候が後々スクタレ者に成るべく候仔細は佛道にては生死事大生死切斷生死を離などと云て生死を重く沙汰するなり誠に大切の事と思ひ付座禪工夫など致し候が悟にて死の軽く成者は稀に可有候未悟内に死ぬ事出来たらば大事に思ふ僻付いてゐる故死兼スクタレ可申候死ほど輕き物はなし (後略) (第八卷)

月舟和尚は板倉周防守殿菩提所參州長遠寺住持勤られ候入院の脇

隠居當住を周防守殿請招有り御亭主唐筆の卷物を御持出久敷持傳へ候得共文字讀め申さず候御慰に御覺候て御讀候様にと御申候て隠居の前に差置かれ候唐様の草文字にて殊の外讀兼申す墨跡にて候隠居一覽候得共よめ不申是は月舟に讀せ可申と申候て月舟の前に遣申され候月舟一篇見候て残らず讀め申候得共讀兼候ふぜいにて成程不辨に少しよみ懸け隠居に向ひ此字は何にて可有御座候哉斯様にも讀み申べき哉とたづね伺候て又少しよみかけ右の通仕つづりよみに讀み仕舞申され候左候て月舟庭見物に參られ候跡にて防州御申候は月舟はいかうようござると褒美にて候よし此事月舟直の咄了意和尚承り候由なりその比は未年若に候得共拔群の器量にて候となり (第十卷)

つるぎたらいよよとぐべしいにしへゆさやけく負ひてきにしその名ぞ

萬葉集 卷二十

蛇 足

この蕪雜な一文がかういふ類の本を読み慣れぬ方々の爲にいさゝかの手引とも
なりますよう。もとより博雅の君子の清鑒を仰ぐ可き筋のものではありませんね。

一

所詮はこの世は夢である。葉隠の世界は、しかと身に應へたこの實感の上に建
つて居る。われわれの營みはなべて遂に空に歸する。われわれが辿りうる限りの
昔からすべての社會的な倫理的な努力はいつかは崩れて來た。今後とても崩れ
行く外はあるまい。結果を豫期する努力はいつか必ず破産する時が來るであら
う。われわれの外にも内にもある自然に對していはゞ物理的に勝ちおほせるに
は、恐らくは人間の精神の平均値的な水準はまだ力足りぬ故なのであらうか。
われわれがひと度己れの運命を過去と未來に互つてこのやうに觀照する時、
いかなる態度がその後もこの感慨に耐え續けうるであらうか。理想主義もある。

いつかは崩れるとは知りつゝ、その悲劇的な戦の高揚に心情を淨化されては、人はその一生をも賭けるのであらう。藝術へ、宗教への道もあるが、葉隠は更に別の道を——己れの一身をそのまゝ藝術化し、その藝術の力によつて、理想主義の如くに行動に生きながらしかもその行動の生む悲劇を遙に超え出る一つの道を、切り開いて行かうとする。それはもとより結果に執せぬが既にその戦にもまた執せぬのである。運命による勝敗の決は遁れ難い、をのこと生れた甲斐に願ふところは夢にも似たこの地上に於ける勝敗を超えた絶対の勝利、敗けるとも勝つ道である。その勝負のゆかしさに心打たれて、敵も、運命自身さへも、己れの勝利を悔み始めるならば、敗れた者は同時に尙ほ勝つたのである。地上の勝利が必ずしも、また何時までも、確かではない時、これは人間にとつて確かな、そして可能な勝利である。たゞ、一つの至難な条件を充たしうるならば——その一身をそのまゝに全く藝術化するならば、行動の藝術化は絶対的な勝利の必須条件なのである。かうして、理想主義的な倫理を捨て、戦を超えた、純粹觀照の謂はゞ空の中から、逆に、あらゆる志向的關心を滌除された、純粹な、形式的な、活動力自體とも言ふ

べきものが、既に運命の戯れの中に身を任せ切りながら、また優しく運命に戯れかける折を待ち設けながら、身も軽く進み出て来る。思ひ追つた瘴癘的なヒロイズムの微塵もない。厭世觀の暗い陰も、智慧に澄んだその額にはさす餘地も見い出しえまい。命などは散つて行くもの——運命を見据えたこの涼しい、命をも賭けて打ちこんだ觀照から、如何に測り難い燃燒力をもつて行動が爆發して来ることか。また、この生命の緊張が次々に生む言靈の白熱した氣合を見よ——打ちはまる、きれい、やさし、ゆかし、見事、散る、きれい、せりつめる、極まる、覺えある、時明く、分別なしに、嗜む、奥深く、名残つきぬ、あかれず、ハッキリと、立ち上る、上は手取る、凜としたる、たるみなく、手早く、胸すわつて、つつきる、まだるし、踏みわる、仕てのける、等々。

平生の「吟味」「覺悟」「嗜み」は、かうして「伊達や風流」のあだ事ではありえぬ。葉隠に於いてそれらは、理想主義の倫理的な努力に代る、全身の一つ一つの行動の藝術的

磨き上げの爲の人知れぬ努力である。その嗜みは、わけても死の嗜みに至つて極まる。絶對の勝利を願つて敢へて一生を賭けもした行動の藝術化が、最後の仕上げをうけて完成するか否かはたゞこの死一つにかゝる。運命は單に組伏せらるべき敵であるばかりではない。共に戯れる遊びの主人公か、運命の客となつてゐるならば、「能き客振」が客の唯一つの仕事である。あかれもせず早くも歸らざるように、「主人公」とつて後々までも名残つきぬように、「客振」よければ客は勝つたのである。

數多い武士道書の中で嗜みを語つてゐるものがいくつあらう。しかもその中でも葉隠ほどそれを強調するものを私は未だ知らぬ。これこそ他に索め難い葉隠の魅力である。例へば、有名な宮本武藏の「獨行道」十九箇條と比べるもよい。宛も殺人劍の切先から立ちのぼるやうな、その肅殺の氣はむしろ膚寒い。否、武藏は確かに山本常朝よりも優れた藝術家でもあつたと頭を振る人もあらう。けれども武藏の藝術もまた穎峻いつしか眼に痛い程なのである。嘗つて彼の大作の逸品「蘆雁圖」を見るを得た折、私は自づと同じ題をもつた梁楷の傑作を憶ひ起した。そ

れは北畫の一極致ではあるけれども、南方氣韻の作、まして葉隠のあはれさと血縁をひいた宗達、光琳、乾山の純日本畫とは相去る遠いのである。

葉隠の語る武士道は、單に勝負に強いことではない。義侠一片の町奴の男だてでもない。花も實もあるものゝふと源平の昔から言ひ慣はしたその道なのである。

葉隠と名付けた心ひとつにもゆかしさは流石にこもる。葉隠研究家によつてはむしろ否定されてゐるその淵源——

寄殘花戀 はがくれにちり止まれる花のみぞ

しのびし人にあふこゝちする

西 行(山家集)

を私は信じ度いものゝふの嗜みのこゝろは確かにこの歌のこゝろに根を引き、續いてゐる。それは古今以來六代の勅選集の永い準備を経て、新古今から山家集にかけて始めて結晶したこゝろである。その間の歴史はまた藤原末期、源平、鎌倉、北條と武士道の哺まれゆく歴史でもある。このことは、日本にばかり生れた武士

道と大和の國の名に負ふ敷島の道との一脈の關聯をも既に暗示しようか、平安朝初期以來展開されて來、新古今を中心として次第に結晶して來た、ものゝあはれなる純日本型の美意識例へば、純支那型のそれである「氣韻」と比較せよが、武士道の形成に際して爲した寄與は大きい。山本先生も歌道の嗜みは就中深かつた。「戀の至極は忍ぶ戀」なことも先生の教訓の中にはつきりと語られてある。戀も、侍の嗜みも、こゝろのあはれことに深いように——葉隠一書もことごとく、しい名乗りをあげてはひとの思ひの程も恥かしい、心あらむひとの忍びもしように。

**

葉隠はその至難な願の故に、侍が一藝の上手となることを繰返し惜しんでゐる。如何に武藝に強くとも、そのみの「藝者」がそのまゝに侍ではない。侍であるならば、己れの全身を擧げて藝術品と化することが即ちその藝なのである。がその行動の藝術化とは、一藝一能に秀いでることでもないやうに、また頭の中丈ですむ抽象的な觀照でもない。緊張した生命は具體へくといつも躍り出ようとする願

つて止まぬ、行動の藝術化は社會的な、倫理的な内容を宿して始めて具體的である。刻々の行動が、侍の社會に於ける具體の地位に即して、謂はゞ倫理を超えながら内に倫理を包んで、藝術化される時、身内にあつて具體的な藝術化、即ち倫理化に逆らふ自然的な本能が藝術化され、淨化された時、始めて彼は諦觀の世捨人ではなくて、花も更に實もある武士である。

かうして侍は、葉隠に於いては、奉公人である。公に——頭によつて抽象的な天道ではなく、全身によつて、身近く具體化された公としての「殿様」に、奉ずることであり、その裏をかへせばそのまゝに私の——身内にある自然的本能の、倫理的淨化である。逆に、倫理的の完成は即ち藝術の具體化の完成——「覺悟を嗜み」えた状態なのである。その故に、殿様をもつことは侍にとつて絶対の必要である。奉公人は「主従の契り」の爲にのみ、この世に形を現はしてゐる。その形自身のこととは——生きるか、死ぬかは、奉公の故に始めて第二義のこととなる。葉隠の侍には、本來生死ない。しかも、現身が生きてある間は、ねばり強い倫理的な努力を積み重ねて、肉身をそれに宿る自然的な本能の影もない藝術品にまで淨化して置かなければ、

——何時でも死ぬるように「死んで死んで」されて置かなければ、流石奉公の故とても、心のどかに死することは、間際となつて自然的な本能が許すまい。武士道の具體的なかんどころを葉隠はあやまたずこゝに見出して居る——「武士道と云ふ事は即ち死ぬことゝ見付けたら」。

所謂死の覺悟とは、たゞ勝負に強い爲の鬚勇ではない。諦め半分に尻をまくりながら切るタンカでもない。それは、行動の具體的な藝術化の爲の不可避の前提であり、心理的には、むしろその藝術化自體の原動力なのでさへある。かうして、藝術性から發した具體性が、また逆に藝術性を身のまわりに深めて行く。死の問題を媒介として、具體性と藝術性は相互に浸透しあふ。夢と親じて運命と優しく戯れる。その戯れが死の覺悟の故に、噛みしめる現實の味を更に凝集した、更に濃いものとして行く。死の覺悟の上に立つ時主従の契りも、夫婦の契りも、親子兄弟の結縁も、さては他人も、目に映る自然も、過しやるひと時も、ことにしつとりと潤ほつて、あはれもふかく身に沁みて來ることであらう。情けは一生一人のものなり。

——夢の世ながらこの世の營みはかりそめごとではない。

この道の確かさと實現の可能性とは昔から幾人となない侍によつて實證されて來たところである。が、現身の人間にとつて、それは依然として至難の道である。一人の力は恐らくはその爲に不足である。葉隠は、一流の誓願を——「武士道に於いておくれ取り申すまじき事」を、毎朝「他の同じ人間にはなく、佛神へ念じて、武士道の故に、二人力を祈つて居る。もう一度、獨行道第十八の宣言を憶ひ出してみよう——「神佛を尊み、神佛を頼まず、氏神、軍神、兜の中にも祀りこめる弓矢八幡、人間の埒をはつきりと見てとつた侍の魂の素直さを葉隠はいつも見失はなかつたのである。

葉隠の世界を支へる支柱は擧げて行けばまだまだ多い。例へば、他の武士道書が殆んど語らぬその「大慈悲心」がある。こゝでは武士道と日本佛教との久しいゆ

かり例へば、山本先生に對する湛然和尚の地位の重さを思はねばならぬ。また例へば、その類ひ少い單純さがある。把握は強力な程根本的となり、根本的な程單純化される。葉隱は、内容の貧しい故に已むを得ず單純なのではなくて、柵のやうに四方からまつわりついて、とり／＼の姿に誘なひ立てる數知れぬ言葉と思想とを抑へ難いその生命力に驅られて、ぎり／＼と根元へ、せりつめて行く、その故に單純となるのである。が、もう止めよう、そして多少とも結論の恰好をつけてみよう。

二

葉隱六・七・八・九卷は自ら稱するやうに「男仕事血ぐさきこと」——獨りたゞ心に秘そめ置いて、口を開いて語るのものはしたなく思はれるばかり感動深い數々の追腹の話から、さては切腹の話、討死、切死、成敗の話、それら謂はゞ侍の死に方の臨床的報告の集成である。次々と讀んで行けば、葉隱の生れ出た母胎、往年の武士社會の風習の輪廓もおぼろに浮んでくる。それは、義は重かるべく、命は輕かるべ

きことの説かれた社會ではない、命はわれ人ともに事實輕かつた社會である。いさゝかの意地張り、口上一つ、碁一局の故にも惜し氣もなく命は散つて行き、散らせて行く。まことに惜し氣もなく——遭ひ難い世に受け難い人身を享けたその因縁をわれわれはおしなべて流石愛惜せずには居られないのに、こゝでは或時或人によつてはその惜む心も屢々見失はれてしまふとも見える。勿論それは單に血ぐさいのみの世ではなかつた。たゞ命を惜まぬ丈ならば未開の蠻族も、動物でさへも心得てゐよう。ではなくて、その殺伐さにも拘はらず、その中から葉隱を生み出したそのことに、充分の意義を見よう。生死は尙も輕いが一轉して、この因縁を惜むが故に、藝術的不朽を祈るが故に、輕いのである。この二つの社會の間の精神の躍進の爲には、その血ぐさい風習の中に命を落した人々の運命も空しくはならぬ。その爲の尊い犠牲として浮ばれよう。が、葉隱が生れ、依持されうる爲に、その風習の中にいそ／＼と散つて行く幾千幾萬の生命の重大さを思ふ時、やはり私は心重い。この社會が後代に残した結晶は美はしいが、その結晶と母胎の血ぐさい社會との關聯は結局切り放ちえない。葉隱のやさしさに心打たれるな

らばその楯の半面をも見落すまい。われわれ自身の新しい業隠を生み出す榮光を願つて、われわれも亦往年の血ぐさい風習に還るべきであらうか。威勢のよい封建復興の呼號に私は同じ難く思ふ。

事實、今われわれは家の門を出でるとも果して眞劍に備へるべき敵の一人七もありと感ずるであらうか。またわれわれは何よりも先に切腹の作法を習ふ必要に果して迫られて居るのであらうか。われわれの命は嘗てあつたよりも今遙かに安全なのである。いさゝかの意地にも散つて行かねばならぬ往年の侍を憶へば、各がしじ思ふまゝに因縁を愛惜しうることは恐らく大いなる幸福であらう。その幸福の贅澤さと無氣力な凡庸さに狎れては、却つて命の安全を不幸とも思ふ人々の出でる程までも、そしてこの幸福な安全の續く限り、その代償として、業隠のそのまゝの復興は、假令願ふ人あるとも不可能であり、また不必要でもあらう。

われわれは現在の人間發達の程度に於いては、明らかに全能ではない。全能な

らぬわれわれに、現在全い道も亦存在しえない。われわれの行動はいつも選擇、限定を通じての具體化作用である。その限り、今後のいづれの歴史時代もその始めに當つて否應なく選擇を強ひられる、二つの巨大な社會の範疇がある——血ぐさい風習を伴ふ業隠一流のそれか、無氣力な凡庸と幸福とを伴ふ安全な文明のそれか。

兩者の間の利害得失の利すところない計較は既にわれわれの能力を超えてゐる。われわれは天の流行を僅かに察しながら、ともかく何れか一方に決せねばならぬ。王朝の末に當つて武士達が前者を擇んだやうに、明治の始めに於て元勳達は後者を擇んだ。その範疇の指さす道をわれわれの社會が歩み始めてから六十年、量り難い天の道は漸やくその健やかな流行の滯りを忌み出したのであらうか。願はくは君が代のいつも四海波靜かにそよと枝鳴らす風もないように。しかも現在のわれわれの社會の行手にいづれは待ちうける容易ならぬ大事は、萬一には、久しく忘れられてゐたかの否應ない二者擇一を改めて提出するかも知れぬ。われわれの社會の正反對の範疇を、例へばこの具體的な業隠を通じて検討

し終へ、われわれの社會のまさかの時に於ける態度を一應決して置くことは、現在の必要事の一つであらう。

數多い武士道に關する著述(例へば、武士道叢書、明治三十八年、全三巻の所收では約六十種)の中にあつても、葉隠は純日本語の言靈によつて、純日本型の發想によつて、獨特の地位を占める。例へば、葉隠に先だつ約四十年前に著はされた山鹿素行の「士道」山鹿素行、第二十一巻がある。それは、葉隠と並んで、恐らく東西に武士道書中の双壁であらうが、その内容の表題「知己職分志於道、在勤行其所志、養氣存心、論養氣度量、志氣、溫藉、風度等々」の言葉の示すやうに、その言葉とその抱く思想の範疇に支那傳來の影がさすことは否み難い。「士道」を始め數多くの武士道書が、その結果、ともすれば、支那風の士大夫の道を語り、岳飛や文天祥の亞流を生むに終り易いのに、葉隠はいつも「古今一人」とそのたゞへる實盛のやうな「やさしい侍」——日本にのみ生れたものゝふの道についてのみ語り、しかもその純日本語の

言靈の故に、あくまでも的確に、強く、その道の靈を語りうるのである。それらの言靈は葉隠の世界を組立てる基本的な素材であり、かうして組立てられた世界觀は、徹底した、純粹の、日本型の範疇に屬する。謂はゞ社會の範疇としての葉隠の士風の現在に於ける意味は間接的などころにあつた。けれども、この謂はゞ世界觀の範疇としての葉隠はわれわれ各個にとつて現在直接に意味を持つて來る。

精神の問題とは結局一日二十四時間の過しやう、取組みやうの問題である。二十四時間の自然的な所與を素材としてわれわれは一つ一つの具體的行動を通じて己れの現實を形成し、展開して行く。理念、典型、範疇等も嘗つてある人々の具體的生活、その現實の形成と展開との過程であつたればこそ、普遍化され抽象化され、それらとして意識的に心裡に把握される事も可能なのである。そして抽象的に把握された範疇等が、われわれ各個の現實の形成と展開のそれぞれの手法として勉強され、それらのきつかけとなる限りでのみ、範疇等はわれわれにとつて意味を持つて來る。現實の母胎はいつもわれわれ自身の二十四時間の生活の

側にある。それを見失つたり、範疇等をいきなりにその中に持込んで繼ぎはぎしたり暴力的に歪めたり、することのないように、範疇等は當然のこと乍ら、純粹に形式的に把握されることが必要である。かうして始めて、範疇の型に入れられた通りの色あせた生活ではなく、他の誰れでもないわれわれ各自の具體的な生活が形成されうる。

假りに世界觀の範疇として見るならば、われわれ各個にとつて葉隠はこのやうな意味をもつて現在直接的である。それは、現在われわれの心を引く西洋の及び東洋の數々の世界觀の諸範疇と相並んで、しかもその中に特殊な——純粹の日本型のそれである爲にわれわれに身近く親しましく、歴史の中に嘗つて生きつゞけた傳統であるが爲に他のそれらに比してわれわれにとつて有力であり、現在所謂日本精神が爲にする政略と節操ないジャーナリズムによつて氾濫しつゝあるが爲に俗流化し易い、かゝる特殊な地位を占めながら、直接にわれわれの具體的生活の形成と展開のきつかけとなりうるのである。が、その爲にはわれわれは葉隠の範疇を必ず純粹形式として把握せねばならぬ。かう繰返すのは

葉隠の説得力は珍らしく強烈だからである。そして、それが強ければ強い程、その力に釣り出されて自身の具體的生活から腰を浮かし、理想と現實との間に餘のやうに引き延ばされながら、却つて古人の跡を精進しつゝあるとの錯覺を懷く、その危険も亦大きいからである。が、己れの生命を敬重するならば、葉隠をきつかけとして形成され展開されるわれわれ自身の具體的生活も葉隠さながらではありえず、またあつてはならぬ。(昭和九年四月、國權)同五月號所載)

昭和九年五月廿八日 印刷
昭和九年六月一日 發行

【定價金一圓】

東京市豊島區西巢鴨二ノ二三八三

著者 角 田 貫 次

東京市麹町區内幸町一ノ三

發行者 龜 井 一 雄

東京市芝區田村町五ノ一二

印刷者 神 谷 正 雄

東京市麹町區内幸町一ノ三大阪ビル内

發行所

國維會東京青年部

電話銀座一八五八番
振替口座東京七五三九一

終

